

# 書評

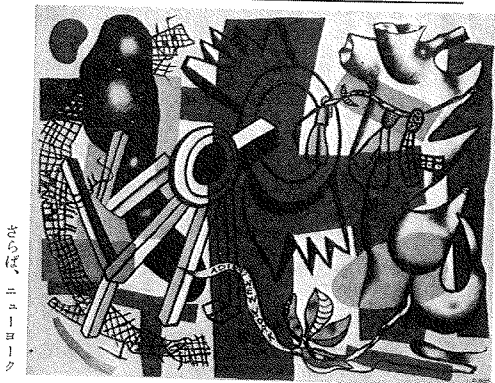
No. 54  
1980. 11



書評編集委員会

1980年11月号 通巻54号

編集・発行 関西大学生生活協同組合・組織部「書評」編集委員会  
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎ 388-1121 内線 776)  
定価 250円



ことば、ニューローク

またそろそろ大学祭の季節が来た。昨年もこの羅針盤で、そのあまりの内容のなさに批判を加えたので今年はやめておこうと、内心は思っていたが、相も変わらず、赤のれんの亜流ばかりの模擬店のオンパレードとなると、やはり一言何かを言いたくなる。一体全体、何のための大学祭であろうか？ いかなる目的意識の下に、何を表現したいのか皆目不明なのが関大の大学祭である。形式的には祭実行委というものがあがり、大学当局と交渉して、何百万円かの予算を費って、大学祭は行われている。しかしながら、結果的には何の内容もないとすれば一体これをどどのように理解すればよいのであろうか？ もっとも、何の内容もないと言うと、比較的的目的意識性の下に企画がつめられた感じのする、社会学祭の人たちから文句が出るかも知れないが、総合的に今年の大学祭を見た場合、やはり何の内容もないと言わざるを得ない。

このような祭の在り方を、敢えて極論すると、関大のデータラメな教育体制のもとでの不満の吐け口として大学祭はあるということが可能である。学生会館もなければ、サークル活動するための部室も満足になく、ましてや学生がゆっくりにくつろぐ休憩室も満足にない。更に加えて、午後8時になれば学生も教師も全て学内から追い出されてしまい、日曜日は学内立ち入り禁止であるのが、現在

1	羅針盤	
4	—— 書 評 ——	
	五十嵐良雄著「裁かれる大学」	
	大学は裁かれたか	
	その後の「しこしことした」生き方	小川 雅也
12	II部大学論の反論を載せるにあつてのわれわれの視点	書評編集委員会
16	—— 書 評 ——	
	「長須祥行著『筑波大学』新構想は何をもたらしたか	
	—— 一尾尾 健氏の書評』に対する反論	
	天六公開自主講座「II部大学論」	
	—— 一閉ざされた門をこじ開けろ—— 実行委員会	
26	—— 書 評 ——	
	大庭 修著「江戸時代の日中秘話」を読む	泉 澄一
33	—— 書 評 ——	
	深沢七郎著「橋山節考」論	
	—— 深沢七郎の視点——	江崎 明
38	—— 研究余滴 ——	ボードレール 2
	ボードレールとパリ (その2)	山村 嘉己
45	日本中国 ことばの来往 (その3)	芝田 稔
50	北京で生活して (2)	鳥井 克之
62	お知らせ	
64	編集後記	

書評編集委員会80年度活動の総括

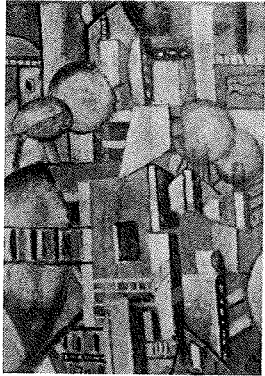
の関大の実状である。一体、これが大学かと言いたくなく  
るほど無茶苦茶な管理体制をひいているのだから、当然  
学生の内にはこれらの不満が蓄積されている。このことは  
大学当局も充分承知しており、一年に一回の吐け口を  
大学祭として、学生に与えていると言ったら、あまりに  
うがった見方であろうか？

あの筑波大学では昨年処分を覚悟して、自主大学祭を  
行った。ところが、関大では、大学祭の位置づけも、目  
的もないままに祭実行委員が結成され、大学当局と交渉  
して、何百万円かの大学祭予算を貰っている。このこと  
の意味は2つに1つしかない。祭実行委と当局のなれあ  
いか、もしくは大学当局の全く意図的な学生の不満解消  
政策として予算は出されている、ということである。

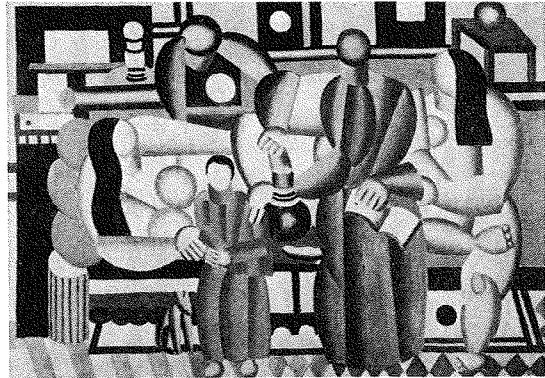
というも、位置づけも目的もはっきりしないのに、  
大学当局が何百万円もの予算を出すこと自体がおかしい  
からである。このいずれにしろ、大学当局の政策的意図  
は明確だ。つまり、高い授業料と内容のない大学の在り  
方に対する、全ゆる不満を少々数百万円の涙金のアメで  
解消するためであるからだ。少くとも祭実行委の人たち  
は自主大学祭を決定した筑波大学以下の意識しかないの  
が現在の関大の実状であることに気づいて欲しい。コッ  
プの中でいくら暴れても何も変りはしないのだ。筑波大

の学生たちは少くとも主体的に目的意識性をもって、コ  
ップの中にあることを拒否し、コップを割ったのだから。  
今日、青年学生がテーマとすべきことは山とある。昨  
年来防衛問題はかますびしく語られており、間経連の日  
向会長は徴兵制と軍事予算増大の発言をしているし、永  
野日商会頭は軍事産業の育成と武器輸出解除発言をして  
いる。

加えて、国体には正式に銃剣道が種目になっている。  
銃剣道とは言うまでもなく殺人技術を競う戦争での歩兵  
の基礎訓練科目だ。この一連の政財界の動きが、何を意  
味しているのかは明確ではないだろうか。もちろんランマ



パリの屋根



室内の女たち



パイプをふかす兵隊

コミもコントロールされている。この一年余、全ゆる週  
刊誌に一貫して軍隊の必要性と日本の軍事力の弱さのキ  
ャンペーンを行っている。その証題に毎週いづれかの週  
刊誌に必らず軍事特集が組まれているからだ。

他方でテレビでの正義( )の味方たる警察ものの横行  
その内容は正義( )のためには何をしても構わないとい  
うものだ。ここでは何が正義かということは一切語られ  
ず、すでに正義はあり、その正義が悪を全ゆる手段でや  
つつけるのである。これは侵略者の思想以外何物でもな  
いのではないだろうか？ (一)

五十嵐良雄著「裁かれる大学」(現代書館 一、五〇〇円)

## 大学は裁かれたか

その後の「しこしこした」生き方

小川 雅也

「大学解体」はなされたのであろうか。一九六九年を中心として、日本の主な大学のほとんどを席卷していった大学紛争の最終的主要主題が「大学解体」であった。それは、関西大学においても最初は「五項目要求」に表われたように、個別、具体的な改革要求であったが、そういう要求の理論的根拠を徹底させていくとともに生れてきた発想であった。

あの時の紛争は、周知のように、日本固有の出来事ではなかった。明治維新以後、日本が近代化のお手本としたヨーロッパが、その先駆けをなしていた。本家において大学制度にともなう諸矛盾がのびびきならぬところま

で進み、それを学生パワーが打ち破ろうとして、動乱の日々が続いたのであった。ヨーロッパのコピイみたいな日本の大学制度が、それを動かす人間関係や人間の在り方を含めて、一足先にそこを突き抜けていたとは考えにくく、とどのつまりは、日本へもその動きは波及していった。

本家のほうでは、たとえばフランスでは、少くとも制度的には大学は解体されていった。「五月初め。やがて驚くべき速度で野火のようにフランス全土に拡がるストライキの発端、パリ郊外ナンテールの文学部を中心にした「極左派」学生の行動は、未だ極めて小さな火に過ぎ

ない。その大学管理への参加要求や、学生寮における男女学生の自由交際問題等については、当初ドゴールおよびボンビドゥー内閣は嘲笑的といつてよい姿勢を示していた。しかし、ナンテールの学部の閉鎖、ソルボンヌの閉鎖、警察権力の学生運動への介入、学生大衆と警官隊との激烈な衝突、そして労働者による学生運動支持の五月一三日ゼネ・ストといった急激な政治状況の変化をみるにおよんで、ボンビドゥー内閣の閣僚たちの顔から笑いはおろか冷笑の影すらすっきり消えていた。とどくにかつてフーシェ改革とよばれる教育制度の「改革」を試みた元文相で現内相フーシェ、さらに文相バイルフィットは、警察権力行使の行き過ぎ、不手際をあらゆる方面から非難され、大学「改革」の拙劣さを批判され、時間の経過とともに彼らの相貌はさらに蒼ざめた様相を呈した。アフガニスタンにいたボンビドゥー首相、ルーマニアで熱烈な歓迎をうけていたドゴール大統領もあらためて内政のものつ重さを知ったであろう。彼らは蒼惶として帰国した。この一〇年も続いたドゴール体制に初めて本格的な深い亀裂が生じ始めた。(海原峻『フランスの新左翼』合同出版)

このようにして、フランスにおいてはドゴール体制は完全に崩壊した。それとともに、ナボレオン一世以来の

「極度に中央集権化され、行政機構の管理体制が厳しかった大学も改革されていった。旧制度の二十三大学が五七大学、八大学センター、三国立理工科大学に再編される」とともに、財政、管理、教育各方面にわたり大幅な自治が認められることとなった。運営機関も文相任命の学長が主宰する大学評議会に代り、「参加」の精神に則り、教授、助教、講師、その他の教員、研究員、学生、職員それぞれを選出母体とする協議会が設置された。もつとも、少数精鋭の超エリート養成機関であるグラランド・ゼコールはほとんど改革されず、研究機構の革新も既得権がからみ、おいそれとは進まない面もあったが、大改革がなしとげられたことには変わりがない。そして、この改革は今では「五月革命」と呼ばれている。

フランスでは、大学のキャンパス内に起った烽火が国家の政治体制を倒すまでに至ったのは、生産過程を握る労働者の広範に広がる大規模なゼネストが呼応したからである。六八年五月、一千万労働者(人口五千二百万人)による工場占拠ゼネストが行われた。この数字は組織労働者の二倍に当たるから、単に労働者大衆が上意下達の指令によって動いたというだけでは説明のつかない連帯意識が働いていたのであろう。この過程では、フランスの工場、職場や大学内に無数の行動委員会が結成された

といわれている。イタリヤでも、六九年のあの「暑い秋」には、同じく一千万人の労働者が工場占拠セネストを貫徹した。それが大学制度面では入学試験廃止などという形での改革となっていた。

西ヨーロッパで労働者が立ちあがったのは、労働者も生産管理機構のなかで厳しい締めつけを受けており、被抑圧者として、学生と連帯していける素地があったうえ、大学改革運動への弾圧にみられる国家権力に対する猛烈な反発があった。そして、なによりも大学制度にともなう諸矛盾解決は国民的課題であった。学生達の問題は、同時に労働者大衆、市民の自分の問題でもあった。ところが、日本においては、学生の要求は最終的には大多数の労働者大衆の共感と連帯を呼ぶことがなく、学園の中にしだいに封じ込まれていった。その孤立化は、一方でその闘争の論理と行動の激越性をいっそうつものらせてゆき、ついには国家権力と真正面からぶつかり、圧殺されることになるのである。今では、「新左翼」なるものはわずかに一部の新聞や雑誌にとりあげられるだけで、国民の大多数の日常生活の場からは遙か遠いところにある。大商業新聞が取りあげるのには、決って内ゲバやスキャンダル、あるいは大学紛争の残務処理的扱いしか受けない関連裁判の報道くらいのものである。

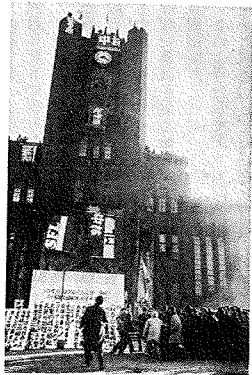
私が、もっとも大切に考えることも、そのことに通じる。あの大学紛争時には色々なことが起り、不毛な否定されるべきことも多くあったが、私が受けとめるべきだと思つたのは、学生の根源的な問いかけの部分「大学とは何か」「学問とは何か」ということであった。私の場合、あの紛争があった後では、それがなかった以前とは同じ意識をもって、生きられなくなっている。「大学とは何か」「学問とは何か」とくり返し問いつめられて、自分でも明確に答ええなかつた痛みが、今だと自分の内部に巣くっているからである。その体験をどう生きるかが、無力ながらその後の私の課題の一つであったが、同じ気持でいる同僚は決して多くはないが少くもないように思う。

五十嵐良雄氏は「既に一九六八年、六九年の全共闘の大学闘争によって裁かれてしまった大学や戦後教育のなかで、その闘争を総括しながら、しこしこ生きていく」人間の一人である。氏は一九三〇年生まれ。第二次世界大戦後、一九四八年九月に結成された全学連のなかで、戦後日本の学生運動の一端を担うが、一九五五年の日の六全協以後、学生運動や政治活動の世界から身を引き、「表現領域の世界」で生きるようになる。そして横浜国

日本では、あの大学紛争は、六〇年反安保闘争などのときのように、ただ挫折感をもって振り返るだけのものになってしまったのだろうか。大学は裁かれたもののであらうか。大学は、まったくのどこ、表面にはほとんど何も変わっていないように見える。その判断は、基準をどこに置かによって、大きく評価が別れるところであろう。大学の制度としては、その後改革案の検討が多くの大学で何度もくり返されたが、本質的にはほとんど何も変わっていないといえるだろうか。しかし、実態においては、旧体質を侵食するかのようになり、大学を変えていっている部分のあることも事実である。たとえば「処分権」の問題である。処分権撤回は、大学紛争時における学生要求の一項目であったが、制度的にあるこの処分権が（本学では、学則第四十一条、ほとんど）の大学で実質的には使われていない。「大学の秩序を乱し、その他、学生としての本分に反した者」を退学させるという項目を空洞化したのは、あの紛争であった。ほとんどの大学が、今この問題を避けて通っている。それは、この処分権を用いて新たな紛争を引き起すことを恐れている場合もあるが、「学生の身分とは何か」などという、もっとも本質的な問い掛けに答ええずして、この処分権を行使することなど不可能だからでもある。

大の非常勤講師であった時、全共闘時代の教育共闘の中心部の人々と遭遇し「独自に思想イデオロギー、活動の拠点としての教育研究所」をつくる発想をえて、現代教育研究所を創設し「反教育シリーズ」を主宰していく。一九七八年には、大学の専任教員となる。その間に氏は武井昭夫、五十嵐夫人、吉本隆明、太田竜などの諸氏を知り、その影響を受けながら、自己の世界を築きあげていく。教育者としての氏がとってきた態度は、常に反権力の側に立ち「人間疎外を前提にきて成立してしまっている今日の学問のなかで、自分自身の主体を奪還していくこと」であった。

この本の第一部では「大学に関する国家意志、即ち国家権力が打ち出してくる大学政策と対決し、国家権力によって、大学とはなんであったのか。国家権力にどう対峙し、大学とは、一体、どういうものとして存在しているのか、等々の、大学に関する国家意志との緊張関係のなかでしか、大学の本质を私たちは認識することが出来ないのだ」という立場から、日本の大学政策の歴史的変遷過程をたどり、具体的問題として卒論を、新制大学になり大学が重視され必須であった卒論が、次第に軽視され、単位数も減じられてゆき、ついには自由選択制へ



1968年団交を拒否された学生側は無期限ストに突入した

と移り変わる様が分析され、今では、大学大衆化を受け入れ卒論をなし崩し的に廃止してしまっただと、現実の大学を(旧制大学の)大学幻想をもってカムフラージュするために、卒論を相変わらず卒業認定のための必須単位として学生に課している大学の二つに大別できるという。そして「卒論とは、大学四年間における自己形成の総括」として、横浜国大において展開された卒論闘争の実践例が紹介されている。

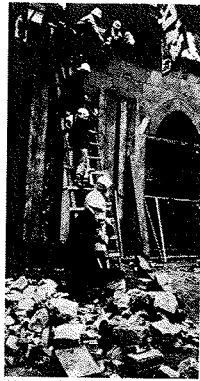
第二部では「人間の本质とは、まさに、関係の総和である」という認識で、生きている現実と、それとどう係わるかという人間の姿勢や方法を通して多くのことを学任教員となり、教職課程を担当することを「負い目」と感じながら、そのことを本書の数ヶ所で触れている。「大学を解体していく解体のしかたとして、自立する」という、大学を出て就職するということじやなくて、大学のなかで研究所を設立し、大学のなかでひとつの思想運動や、教育運動を展開していくという方向を目指すわけだ。そういうふうな主張をしていた人間だから、いろんな偶然や、さまざまな関係のなかで、ぼくみだから、いろんな大衆に呼ばれるということは、呼ばれるだけの理由や根拠はあるし、それから、呼ぶ側にも、ぼくのような考え方に賛成する人たちがいるという、そういう状況がそれなりに全共同以後つくり出されているわけですね。」とも語る。

氏のそういう立場性を生かしうる大学は、現実的には日本ではまだ少数だろう。しかし、その可能性もまたないとはいえない。氏の主張するように「人間の本质とは、社会的諸関係の総和」であり、「人間固有の、その人間独自の出会い」というものは、現に生きている具体的な人間との出会いと、その人間との関係のなかでしか形成されていかなう。だけに、大学でも何かをなしうと考えるべきだろう。今の客観的諸情勢のなかでは、自分のできることを、できる範囲のなかで最大限に行うことしか、道

ぶと同時に、その生き方のなかに「実は、私たちの思想形成の契機が存在しているのだ」ということを学びとってもらいたい、という意図で対談が収録されている。「なぜ虚妄か、戦後史を執る(対談者：羽仁五郎)」「大学問題のかかわり方(対談者：森毅)」「虚像と実際の大学教員(対談者：高橋睦正)」「大学教師の虚像と実像(対談者：長谷川宏)」である。

第三部では、第一義的なものは「表現されたもの」のなかにあるのではなく、あくまでも「その表現を生み出している人間と、その人間の在り様のなかに在るのだ」という立場で、自己形成史が特に他人との出会いを中心に語られている。

五十嵐氏は、それまで批判の対象にしてきた大学の専



10月7日、広島市に落下した原子爆弾の被害状況。写真は、広島市立美術館の資料館に所蔵されている。

はないだろう。他人のなかに敵を見出すより、仲間を発見することのほうが、遙るかに難しいことだが、その難しさに挑戦しない限り地平は開かない。フランスの五月革命で労働者が立ちあがったのは、個人としての権利意識が強くなり、同時に他人の基本的権利をも尊重するという意識が強いからであった。小さい矛盾よりも、より大きい共通の課題を前にしたとき、柔軟にかつ迅速に連帯できるという、こういう人間関係は過去の戦いと革命の歴史から鍛えあげられてきたものである。ある状況のなかにあっては、前衛が突出しなければ戦線は切り開かれず、事態も動かないという場合もあるが、前衛が主力後衛部隊を置き去りにして玉碎することが不毛場合もある。いわば五十嵐氏は、主力後衛部隊の人間形成に、もっとも根源的なゆさぶりをかけ、「人間らしく」生きることが希願しているのであろう。それが氏の「しこしここと生きる」ことの意味だろうか。

なお、この書の論旨のなかに、問題を残しているいくつかの部分も目につく。たとえば、卒論についても、自己形成の記録がそのまま卒論になるというのは、社会学や教育学の特定の分野においては可能にしても、分野によっては、特に自然科学系では困難だろう。文献なり実験データに基づく実証的研究を通さずには書けない卒

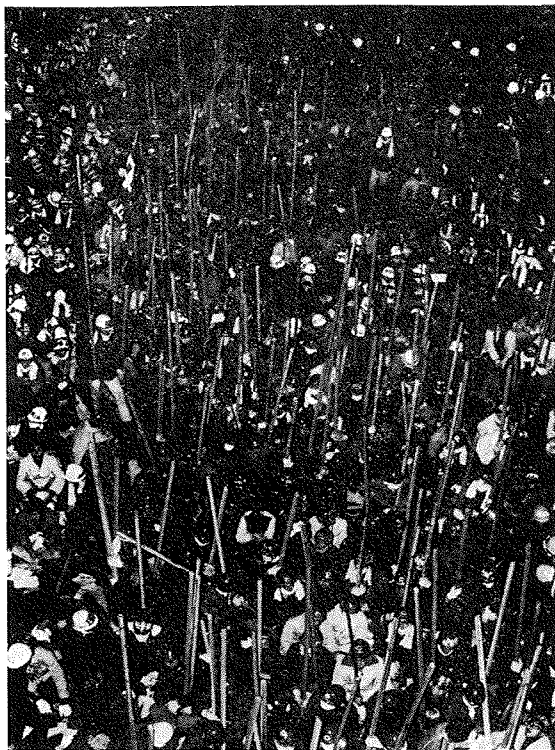


1969年 東大闘争が決戦をむかえつつある日の様子

論のほうが多い。問題は、対象をとらえる論者の意識な  
り方法にある、というべきだろう。森毅氏との対談のな  
かで「最近、大学ははたして解体するに値するんですか  
?」「なんてふつと言われちゃったりする……。もうび  
っくりしちゃう」というような感覚が随所にみられるが、  
あまりにも玉虫色に透彩をほどこざれている現実を相手  
に生きるときには、これでは姿勢の硬直化を招くのでは  
ないか、という気もする。また、上原専禄氏の死につい  
て「学者として一流の人間は、その生き方や死に方に  
おいても、その生涯の閉じ方においても、やはり見事な閉  
じ方をするものである」と述べているが、これを「一流  
の学者なら、見事な生き方や死に方をしておいてはいいもの  
だ」という願望と読みとれば意味をなすが、実態とみな  
すのは無理だろう。いわゆる一流の学者が諸悪の根源で  
ある場合も少なくない。あの大学紛争時、一流学者の多か  
った東大医学部で内部告発が盛んに行われ、闘争ももっ  
とも早くからかつ熾烈に行われた事実をどう説明するの  
だろうか。

それにしても、大学紛争以来十年たった今、そこで提  
起された問題をもう一度思い起すには、この書は示唆  
に富むものだと思う。

(仏文学科教授・おがわ まさや)



1969年1月18日 代々木系と反代々木の内ゲバが続いた。加藤一郎総長  
代行は機動隊の導入を要請。東大闘争は一挙に決戦の日をむかえた。

## 「Ⅱ部 大学論」の反論を載せるにあたっての、われわれの視点

### —書評編集委員会—

前53号で、書評編集委員会は、円尾健氏(仏文科教授)の書評「筑波大学」を掲載した。その書評に対して、関西大学Ⅱ部天六公開自主講座「Ⅱ部大学論」閉ざされた門をこじ開けるノ、実行委員会から、反論という形での論文が投稿されてきた。

書評編集委員会では、この反論を掲載するにあたって、委員会の立場を言明することが必要であると判断、われわれが円尾氏の文章を掲載したいきざつ、われわれは円尾氏の論文をどう考えているのかを述べていきたいと思う。

われわれは、この「筑波大学」(現代評論社刊・著者

長須祥行を、特集企画「大学—教育問題」の一つとしてビックアップした。では、何故、今筑波大学を取り上げたのかと言えば、次のような理由からによった。

昨年の11月の自主管理学園祭、それが学期に違反しているとして学生の処分が行われ、それ以来、学生の処分の撤回を要求する形で運動が盛り上がり続けている筑波大学——その筑波大学をわれわれが取り上げた理由は、筑波大学で起っている事が、決してわれわれと無関係であると言ひ切れない——というよりは、われわれの直面している状況と同じであると考えたからである。

において表面化していた。

一円尾氏は、「大学紛争は、日本の大学の閉鎖性を白日の下にさらけ出したが、それを打破し、改革して、開かれたもの」とするところに、それ以後の大学の根本的な課題があったはずであり、それが筑波大学創設の大義名分でもあったことは、著者(長須祥行氏)自身も認めている。だが、あれほど猫も杓子も口にした『大学改革』のたどった運命はどうであったか。」と述べ、何も変らなかつたではないか、というふうにつづけ、「そのような現状からすれば、紛争の経験を早々と生かし、新構想の大学を実現に移した国の構想力、実行力はそれ自体、高く評価されてしかるべきではないか。」と述べている。だが、これは、どうだろうか。本当にわれわれは、「紛争の経験を早々と生かし、新構想の大学を実現に移した国の構想力、実行力」を評価していいのだろうか? 氏は、この「—書評—『筑波大学』」の最後の辺りで、歴史家・アラン・パロックの言葉を借りて、氏自身の大学観を述べている。

大学の任務とは、「学生を教育する——すなわち何にでも彼らの興味をそそる科目においては彼らのもっている思索の力と創造力を引き出すこと、彼らをはげまし、通常の知恵の表面をつき破って深く問題をさぐり、単一

勿論、この関西大学においては、筑波大学におけるような「事前検閲制」が敷かれているわけではなく、集金を開くことも自由であるし、ビラをまいて、それが無許可であるからといって禁止されることもない。しかしながら、この関西大学においては、一方で学生に自由を与えておきながら、午後8時になれば学生を学内から追い出したり、開大会館の入り口には、前代未聞の「学生立入り禁止」の看板が出ていたり、一方で締めるところは極めて学生を管理している。われわれは、学生を管理して行く大学側のやり方を、開学以来の筑波大学に見て来たし、また、この関西大学においても見ているだろうと考える。

われわれは、右のような理由から、この「筑波大学」を書評してもらうことにより、筑波大生の闘いが一体何を創り出し、どう状況を切り開いて行けるのか、といったモチーフのもとに原稿依頼をしたのであった。

しかしながら、円尾氏から送られて来た原稿は、われわれの考えをいたモチーフとは大きく異なっていた。しかも、それは、モチーフと異っていただけではなく、われわれの、大学に対する考え方も異っていた。われわれと円尾氏の考え方の相違点は、およそ次のような箇所



の単純な解答などない問題と格闘するようにし向けること、自らの知識の限界を悟らせること(自らの無知を知り、真の知識の何たるかを学ぶことは教育の非常に重要な部分である)、そして大学の外の問題に直面した時にもくじけない自信をつけさせてやること」である。

われわれは、この氏の大学観自体間違っているとは思わない。しかしながら、氏が「新構想の大学を実現に移した国の構想力、実行力はそれ自体、高く評価されてしかるべきではないか。」と言う時、そこにおいて、それではその「国の構想」とは何なのかという視点が欠落しているのではないだろうか。「国の構想」とは、いわゆる中教審——「期待される人間像」に象徴される——に基づいた、いわゆる資本に見合った人材を養成することではなかったのか。円尾氏が望むような、真の意味での「学生を教育する」ことに、「国の構想」が進行していない——いけない——ことを見逃していると言えるだろう。

二 円尾氏は、「六〇年代の高度経済成長のころには大衆政策、教育政策といったものがほぼ不在に近い状態であった。」ということを述べているが、これはどうだろうか。大学に対する国家の政策は、一九五〇年代半ばから一九六〇年代の初めにかけて、教員養成大学の師範と。

以上、書評編集委員会の、氏の論文に対する反論点を上げてみた。

では、何故、このような、われわれ自身反論点を持っていた円尾氏の論文を掲載したのかと言えばこうである。われわれは、この論文を掲載することによって、一つの論争を創出しようとしたのであった。このことは、円尾氏自身も、このあいだの合評会に出席してもらった時に、「今日はずるし上げられるだろうと思って来ました。」と、半分じょう談めいて言っておられたが、そのことを覚悟の上で、半分挑戦的に、この論文を書いてこられたようだった。

このようないきさつがあった上で、われわれは、円尾氏の論文を掲載することに決定したのである。

幸いに(一)、今回、「II部大学論」実行委員会の方より反論が投稿されて来た。われわれは、これをきっかけに、「大学論」に関する新たな論争が創出されることを願うものである。

学校化、そして一方では、技術革新時においては、人的資源→産業人の供給源として資本の側からの職業専門大衆構想として存在していたのである。氏の、大学政策の見解については、少々浅さが見られるとわれわれは考える。

三 最後に、大学に関する意見が述べられているところではないのだが、氏が「著者(長須洋行)の考え方の根本には、国家や資本を単純に悪玉、人民を善玉、ないしは前者を加害者、後者を被害者と見たる一時代前の左翼の公式的な考え方が、強く横たわっているようだ。」と述べ、あの田中角栄を選出したのも人民自身ではなかったかと述べる時、氏の見方には、事の本質を見逃しているところはないだろうか。民主主義という制度は、基本的には国民一人一人に参政権が与えられ、実際に政治家を選び出すのは、氏の言われるところの「人民」なのである。だが、多数決原理によって、民主主義制度は、少数者を閉口させることは可能である。また、民主主義は、民主主義の名の下で、民主主義をやめることだって決議できるのである。そして、実際には、その制度は、権力を持つ者によってしか機能しない——し得ないという視点を、氏は欠落させているのである。そして、権力者は言うであろう。「オレを選んだのはお前らではないか。」



室内の女たち

「長須祥行著『筑波大学』新構想は何をもたらしたか  
— 円尾健氏の書評」に対する反論

天六公開自主講座『Ⅱ部大学論』  
— 閉ざされた門をこじ開けろ！ —

実行委員会

はじめに

「編集部から頭書の書評を依頼され、果して適任かどうか、心もたない——筑波大学には行ったこともないし、教職員にも学生にも、だれ一人として知り合いもない、それにもとと大学問題の専門家でもないから——」ままに引き受けたのは、こちらも大学人である関係上この問題を避けて通れないし、この機会にそれについて、多少考えてみるのも悪いことではないと思っただからであった。そのようなわけで、以下は筑波大学問題を通して、私のささやかな現代大学論ということになる。」(傍点)

るのではない。彼の書評の問題性を如実に表している部分であるから批判しているに過ぎない。念の為に。

我々は関西大学の一九八〇年度の一方的、抜き打ちの大幅な学費値上げ(Ⅱ部においては従来の六万円から約三・三倍の二〇万円に)に反対する「学費値上げ阻止全学共闘会議」の運動を契機として、現代の大学の在り方を問うていく為に「天六公開自主講座『Ⅱ部大学論』」を開講し、大学解体(制度的)——再構築(自主的)の作業をすすめているのだが、円尾氏の『筑波大学——新構想は何をもたらしたか』に関する書評は、単に本に対する批判のみならず(それさえも不十分だが)、中教審大学とも呼ばれる筑波大学を讃美していることは犯罪的でもあり、到底許容することもできないので反論するものである。

1

さて、『筑波大学——新構想は何をもたらしたか』を讀むと、いわゆる大学紛争を逆手にとった新構想大学——中教審大学としての筑波大学の実態があまりすなく伝わってくる。

一九七四年の開学以降、紛争なき大学を標榜していた筑波大学において、一九七八年の暮におこなわれた茨

自主講座実行委、これは円尾氏の書評の冒頭の部分であるが、何故長須祥行著『筑波大学』という本の書評を書いたのかということが述べられている。

結論から言えば、円尾氏はこの本の書評を書くにあたって適任ではないし、「筑波大学問題を通してみた、私のささやかな現代大学論」というのを「筑波大学」に名をかりた、私のささやかな現代大学論」と改めるべきである。更に、「この機会にそれについて多少考えてみるのも悪いことはないと思った」という軟弱な動機であれば「多少」ではなくもっと充分に考えてから書評を書くべきであろう(ただ単に紋切り型の文章にケチをつけてい

城県会議員選挙で、筑波大学の所在地である新治郡桜村から出馬した保守系議員の運動員に、一人当り三千円で不在者投票に付き出された、学生一四三人が書類送検されるという事件が発生した。これは取りも直さず学生行動が全て許可制になっている筑波大学の管理体制の中で、純粋培養された学生の政治的感覚の欠如が露呈されたものであった。つまり、単なる選挙違反として学生に責任を押しつけるのであれば、当然その土壤となった学内管理体制の打破が必要ならなければならない、と訴える学生に対し当局は力によって鎮静させたのである。しかし、翌年の一九七九年には「学園祭くらい好き勝手にさせてろ」という全学的な声になって、次のような八項目要求が大学に対してなされ、紛争なき大学が、大きく揺らいだのであった。「①学園祭企画の顧問教育制撤廃を要求する。②学園祭の企画内容審査の撤廃を要求する。③学園祭期間内の学内祭に必要な全ての教室の自由使用を要求する。④学園祭期間内の機材・備品の自由使用を要求する。⑤学園祭における時間制限の撤廃を要求する。⑥学園祭当日の出版物は実行委の責任のもとに全て自由配付できるように要求する。⑦学園祭に関する掲示物は実行委の責任のもとに全て自由掲示できるように要求する。⑧学園祭運営上の必要経費を要求する。」

それはまさに、学生としての最後の一线を守る為の要求であり、ギリギリの抵抗である。いわゆる「学生活動家」タイプのない筑波大生六〇名が、大学本館に突入し、学長に閉交を要求して坐り込み、或いは三〇〇人以上の抗議集会を行ない、実質的な学園祭の自主運営——三日間の学内管理体制からの解放——を勝ちとった。しかし、大学当局は「学内秩序の維持」、「教育的措置の一環」という大義名分により、学園祭後、無期限停学七人を含む一八人の学生の処分という報復処置でのごんだのである。

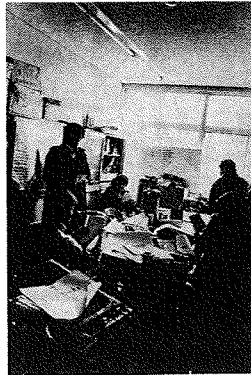
筑波大学は「開かれた大学」の理念を遂行する為に、また「紛争なき大学」を維持せんが為に徹底した学内管理強化体制を敷き、「従順な学生」の培養を目的としている。その先兵として、学生の動向に注意を払い、直接弾圧を加えるのが「学内クイック」と呼ばれる学生部学生課と、「学内公安」と呼ばれる学生担当教官室である。集会を開くには、責任者を決めて集会開催の五日前迄に集会議を学長宛に出して許可を受けねばならない。また学内でのビラ、ポスター、立て看の配付、掲示は、現物を添えて許可願いを学長に提出しなければならず、当然、政治活動や大学批判のものには不許可の烙印を押されることはざけられない。例えば、一九七七年に学園祭で

学の運営に反映できるようにする、という建前で設置されている。しかし、開学当初に名を連ねた参与会のメンバーは、土光敏夫経団連会長、堀田庄三全国銀行連合会会長、柴田周吉元三菱化成工業社長などであり、誰に対しても「開かれた大学」なのかを雄弁に物語っている。

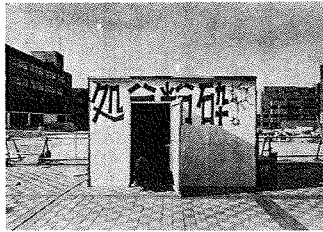
もう一つ、大学運営の効率化をはかる目的でつくられたトップマネージメント方式による集中管理システムという強大な権力集中機構は、一種の学長独裁政治を許すこととなった。そればかりが、従来の学部教授会にかわる教員会議は制度的には諮問機関にすぎず（大学紛争当時の要求を逆手にとったものである。新構想大学には、教育を託してない教官は「大学の研究者という」、教育行政に不向きな人間が多いですね。それに、あの大学紛争で自分達の権限や能力をこえる要求を学生達につきつけられて、さんざんな目にあっているから、政教分離を大いに歓迎するむきが強かったということです。しかし、たとえ教員会議が、制度上は単なる諮問機関にすぎないとしても、民主的なルールに則って運営されるならば、それなりの「自治組織」になり得るとわれわれは、踏んでいたんですが、どうやらわれわれの見通しは楽観視しすぎたと言わざるを得ないようです。」と言っている。

羽仁五郎氏の講演会をするに当り、「筑波大学を批判しない」「自由討論はやらない」という二条件をつけられて、ようやく許可になったが、その講演においても学生担当の教官がズラリと会場の後ろのほうに並び監視しているといった有様である。更には、「学園祭の方針を決めるのは厚生補導審議会なのか学生なのか」というテーマで開かれたキャンパス、外での集会にも学担や学生課の職員が監視に来るといった徹底ぶりである。

この大学のいう「開かれた大学」の根拠となっている参与会と呼ばれる学識経験者、地域社会の関係者、卒業生などからなる助言機関は、広く社会の適切な意見を大



学内の一室を反処分連絡会議が占拠したようす



反処分によって大学中央広場にたてられた  
団結小屋

このように、長須氏の『筑波大学——新構想は何をもたらしたか』という本を読んでいくと、いわゆる新構想大学という美名にかくされた中教審大学の実態を知ることができる。長須氏はフリージャーナリストとして、主に農業問題を中心に多数のルポを発表されているので、御存知の人も多いはずである。長須氏が筑波大学の近くに居住しているということもあって、かなり綿密な調査に裏づけられた、且つ管理される側から見た克明なルポは、我々にとって筑波大学の問題が個別筑波大学だけの



1980年4月20日 東京清水谷公園での筑波大闘争通常集会

さて、当世風の「反体制批判」を一席ぶった円尾氏は大向うの喝采でも博すことができたと思っただのか、勢いついて、中教審大学と呼ばれる筑波大学讃美を続けるのだが、「大学人」としての自負心が見事(?)に露呈されている。

さて、この『筑波大学』の著者はきびしく筑波方式を批判し、最後にはその解体まで予言するという、派手な糾弾を行なっているが、その批判の物差しは意外にあまり空虛であり、底が浅いように見受けられる。大学紛争は、日本の大学の閉鎖性や独善性を白日の下にさらけ出したが、それを打破し、改革して、「開かれたもの」とするところに、それ以後の大学の根本的な課題が

問題ではなく、四・二〇通達と呼ばれる学生・教官の管理を一層強化しこれに抗議する学生には重砲弾をもって処せとする文部次官名の通達(一九七八年四月二〇日)に代表されるように、中教審路線——大学再編は筑波大学を先頭に進められているものであることを教えてくれる。しかしながら、前述の教官のように、いわゆる反体制と呼ばれる教官の中にも筑波大学に期待をかけ、失望していった人も少なくはない。のみならず、筑波大学の本質を隠蔽し、恰も下からの要求を国家が先取りしたかの如く筑波大学を讃美する御用知識人も少なくはない。

次に述べるのは、本誌の九月号(No.53)に掲載された関大の円尾建氏の長須氏著『筑波大学——新構想は何をもたらしたか』の書評についての反論だが、その本を批判しつつ、新構想大学としての筑波大学讃美は、その根拠を大学人たる自負心のみに基づくという極めて軽率な、しかも独断と偏見に満ちた悪質なものであると判断し、反論するものである。

2

円尾氏は『筑波大学——新構想は何をもたらしたか』を批判するにあたって、まず全体の四分の一から五分の一のスペースを当てて、内容を羅列している。ところが、

その次には、内容の紹介を受けて、このように円尾氏は述べている。「これで、不十分ながら、このルポの紹介の責は一応果たしたと思うが、以上からもこの本のねらいや調子は明らかであろう。著者の長須は、序章によれば、一九七九年秋に東大自主講座「大学論」で、大学論を一席やったこともあり、それから察せられるように、いわゆる反体制制あるいは新左翼的傾向の人物のようである。そして、この本も、客観的なレポートというよりは、むしろ反体制的立場からする、筑波大学の「危険な体質」の告発である。もちろん、いかなる思想信条を持つと、体制側につこうと反対しようとする各人の自由だが、ただこの告発が、客観的にみて十分説得的であるかといえば、大いに疑問があるといわざるを得ない。ここで、私が著者の尻馬に乗って、サルトルの『知識人は反体制的でなければならぬ』という、例の知識人論でも借りて、いかにも当世風の体制批判を一席ぶちでもしたら、大向うの喝采でも博することができるだろうが、そんなことは冗談にもするつもりはない。私はサルトルの知識人論を浅薄でつまらぬものと考えており(創元社「知識人論・その虚像と実像」所収の拙論参照)、それに「知識人と当世風の知識人として通用したいと思わぬからだ。」と言っている。

東大自主講座で大学論を一席「反体制・新左翼的傾向の人物というレッテルを貼り、自分の破綻した論理を合理化する手法は、どこかの『過激派キャンペーン』を彷彿させる。それに、反体制「スタンド・プレー」でも言いたげな表現の後に、自分だけすまして当世風の知識人として通用したいと思わぬなどという文章は、悪しき知識人の典型ではないか。彼が言う「客観的」が「主観的」と変わりないことも注意しなければならぬ。

3

あったはずであり、それが筑波大学創設の大義名分でもあったことは、著者自身も認めている。だが、あれほど猫も杓子も口にした『大学改革』のたどった運命はどうであったか。東大紛争の十年後の今日、何も変らなかつたという意見の方が強いようである。あれほど燃えさかつた紛争も、結局はただの空騒ぎにすぎなかつたということなのか。そのような現状からすれば、紛争の経験を早くと生かし、新構想の大学を実現に移した側の構想か、実行力はそれ自体、高く評価されていかるべきではないか。筑波大学にはわれわれの方で見習うべき点がたくさんありますね。紛争当時、われわれ教師も学生もどうやってみたかと思つた大学改革のいろいろなものがあるが、あそこで実験されているわけで、われわれは筑波大学がうまくいくように後押しをしたいですね」というのが、大学闘争で学生たちに『つるし上げ』られた経験を持つ、芳賀徹・東大教養学部助教授の、筑波大学に触れての当時の発言だが、それがもとで学生に追求され、その時の感想を『筑波大学よ、ガンバレ!』(『諸君』一九七四年十月号)自主講座実行委①——『筑波大学——新構想は何をもたしたか』初版では『諸君』ではなく『正論』となつている。大差ないが念の為。)という文章に書き、このルポにも引用されているが、ここにも参考までに載



1980年4月20日 筑波大闘争連帯集会をおえてデモ隊は文部省前を行進した。

せておくことにしよう。——「略——以上の発言は、この本では、改革の遅々として進まないのに業を煮やした大学人の『ごまあみろ!』的筑波礼賛として、新構想としての筑波大学を批判しながら、そのじつ、従来の大学の改革を何一つできない大学人の足もとを見た発言として、否定的にとらえられているが、何もそう色めかねをかけて見ることはなからう。すでに述べたような状況にあって、筑波に新しい大学の可能性を見、それに期待をかけた一、大学人の自然な気持ちとして、ごくすなおに共感できる。」(傍点自主講座実行委)。

この文章を読むと何故か、円尾氏が反体制に対して嫌悪感を抱くのかおわかり戴けるだろう。客観的に彼が見ていたのは、まさに体制側(管理する側)からであったし、彼の足場は体制べつたりのところにある。学生の側管理される側からの要求は、国によってうまくからめとられていることであって目をつむり、ひたすら筑波大学を擁護することに専念している彼の思想性は、管理する側のものである。

いみじくも、円尾氏は、長須氏が「改革を客観的に評価するのを恐れるかのように」「大学の「危険な体質」を持ち出し、それによって一方的に断罪しようとする。そこに問題の短絡とスリカエがある」と述べている。

しかし、円尾氏の国家主導の改革を評価する割には、  
「危険な体質」を隠蔽せんとする態度こそ、問題の短絡  
とスリカエがあるのではないか。ちなみに、長須氏は  
「筑波大学のとうてい看過できない『危険な体質』があ  
る(まさにそのことを書くのが、この本の主たる目的が  
あるといえる)」と述べていることをつけ加えておこう。

#### 4

円尾氏は筑波大学を評価することに限界を感じてか、  
再度その矛先を著者の長須氏に向けるのだが、トーンが  
上がすぎて、いささか感情的な批判が多く目につく。  
例えば、「要するに、かれは国家や資本を敵視してい  
て、筑波の場合も、改革が国家主導であるのがどうもシ  
ヤクにさわって認めたくないのだ。すなわち、筑波大  
学は真に『開かれた大学』への変革を怠った日本の大学  
の虚を突いたような恰好で建設された大学なのである  
』と書いているところに、それがよくうかがえるのであ  
る。トーンに油揚をさらわれたように、国家に改革を先取り  
されて切實扼腕というところか。」などと一人悦にいっ  
ている。

長須氏が「人民の側の、真に開かれた大学をめざす」  
と述べたことに対し、円尾氏は「人民」とはいったい  
「大学の現状に関するレポートというよりは、むしろ大  
学を自分の反体制趣味のために利用したといった感さえ  
ある」とまで言っている。

円尾氏は、書評の冒頭で述べたことを忘れたのだろう  
か。「筑波大学には行ったこともないし、教職員にも学  
生にも、だれ一人として知り合いもない、それにもと  
と大学問題の専門家でもない」と言った彼が、筑波大学  
から八キロの所に居住している長須氏のルポに、ある時  
は「果たして本当にそうなのだろうか」と疑ってみたい  
、ある時は「あんまり対象べったりでは見るべきものも見  
えないだろう」と批判したりする。そして、最後には自  
分のことは棚に上げて趣味扱い。

勿論疑うこと、批判することは自由であるし、また必  
要でもあるが、その疑問・批判を公言すべきときは十分  
な論証も必要とされるのは当然であろう。長須氏のルポ  
に対し、円尾氏は単に「大学人」の自負心のみで、筑波  
の学生・教師の実態について疑問を投げかけ、批判して  
いるのである。そして、打つべき玉がなくなるや、「反  
体制趣味」という暴言を投げつけるという机上の知識人  
の無力さ、醜さを露わにするだけであった。

#### おわりに

円尾氏の本書評における誤りは、自らの立場を正当化

だれのことを指すのかいい、例えばロッキードの被告  
人の田中角栄を演出したのは他ならぬ人民ではなかつた  
か、という。夢雪・過疎・出かせぎ・嫁不足・自殺とい  
った特色の強い新潟三区の住民をして、泥棒の親子に例  
え、親(田中)が泥棒しなけりや子は死ぬんぞといわしめ  
ている状況の中で、田中角栄を選択せざるを得ないこと  
を短絡的に「人民の責任」「人民も悪玉になり得ると  
する発想は、この本質を見落とした『都会人』の傲慢で  
あり、円尾氏の詭弁にすぎない。

また、「この本を読むと筑波では、学生は学校の管理  
体制によって骨抜きにされ、教師は教師で、体制によっ  
てがんにがらめにしぼられてやる気をなくし、無気力に  
おちいって、およそ『夢もチホもない』大学とい  
った印象を抱かされるが、果たして、本当にそうなの  
だろうか。『あとがき』によると、筆者は、執筆中に編集  
担当員と共に何度も筑波大学に足を運び、学生や教員と  
話を交え、彼らとともに、この大学のありようについて  
『悲憤慷慨』した、とある。『悲憤慷慨』しようとい  
しようとい一向にさしつかえないが、『アバタもえくぼ』、  
『坊主僧けりや袈裟まで僧い』のたとえどおり、あんま  
り対象べったりでは見るべきものも見えないだろう。」  
とも言っている。更には、極めてつきとも言うべき、

するあまりに、いわゆる右も左も蹴ちらしているつもり  
ながら、常に左を蹴ちらしていたという、つまり、円尾  
氏がそれほど右に位置していることに気づいていないこ  
とである。実際には「客観的」という言葉は存在しない  
だろうし、その「客観的」という基準は絶対的なもので  
はなく相対的なものであろう。円尾氏が「客観的」を使  
うことにより、自らの反動性に気づかなかつたのは残念  
である。

円尾氏の第二の誤りとしてあげられるのは、フリージ  
ャーナリストとしての長須氏のルポルタージュ(現地報  
告)に対処、机上の知識で書評を書いたことである。し  
かも「知識人」としての驕りが随所に見られる。

最後に、この反論が掲載される項には、円尾氏の筑波  
大学に対する考え方も多少変わるのでないかと期待す  
る。というのは、我々天六公開自主講座実行委は、第五  
回目の講師に長須氏を招き、「筑波大学——新構想大学  
の実態」というテーマで講義(一九八〇年十一月一日〇日  
午後六時四十五分より、関大天六学舎一〇一教室にて)を  
して載せ、後半の質疑答の中で、円尾氏に発言してもら  
おうと考え、招待状を郵送した。第五回目の自主講座を  
契機として、円尾氏が自らの不充足さを認識し、関う  
「知識人」になられることを期待して反論を終える。

(天六公開自主講座実行委)

大庭 脩著『江戸時代の日中秘話』をよむ

東方選書5 東方書店

泉 澄 一

「百聞は一見にしかず」のたとえどおり、みなさん、大庭先生のこの新著を読まれるのが一番よろしい。

この本には学問・研究をめざし、知識を求め人のために、大庭先生が榮養満点のエッセンスをふんだんに盛りこんでくださっていて、どこから読んでも榮養つくことまちがいなし。

まず、誰にも納得していただけるであろう本書の特色をあげよう。

一、読みはじめてまもなく、自分の歴史的常識が根底からぐらつきはじめる（足もとをみつめざるをえなくなる）。

（宮内庁書院部蔵、一九七二）など（いずれも関西四大学東西学術研究所刊）である。したがって、江戸時代に長崎で輸入された漢籍に関することが本書の中心だが、研究の同心円的な広がり方にも注意していただきたい。それでは、各章のタイトルと要点などを紹介しよう。

序章 忘れられた日中関係

実は大庭先生のご専門は「古代中国の法制史」である。そこへ本書の分野をご専門に加えても、江戸時代の「日本と中国」の関係である。それなのに先生の研究は世界を股にかけておられる。本書でも中国はむろん、アメリカ・イギリス・オランダ・デンマーク・スウェーデン、ギリシャ、さらにソ連のレニングラード、なんとオーストラリアまで飛び出してくる。

それはご研究に巾と深みがあるからだが（その証拠に先生には外国人研究者の知人が実に多い）、単にそれだけでない。先生の眼は外国にしながら、たえず日本に注がれ見つめておられる。日本の歴史に実に深い関心と洞察力をもっておられるからこそ、対外関係史に深い理解を示されるのである。また、だからこそ日本史の中のきわめて常識的なことにも注目し、疑問をもたれる。

本章の中で、先生は専攻を中国史にきめたいきさつを

一、読者も楽しみながら、史実の探求に参加できる（「ま、い、自分がやっている錯覚をおこす」）。

一、考証の面白さを徹底的に教えてもらえる（これは先生がもっとも得意とされるところ）。

一、グローバルな研究を味わえる（自分が外国へ行っている研究している気になる）。

一、読み終えたら、江戸時代の日中関係史のエキスパートになったように感じる（たいいていの人がそうなる）。

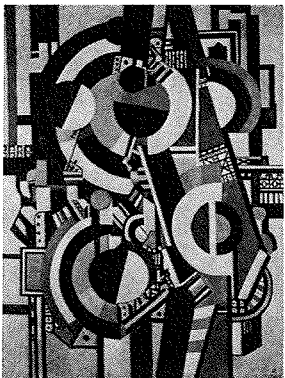
本書の土台になっているのは、先生の大作『江戸時代における唐船持渡書の研究』（一九六七）、『船載書目』

語っておられる。話は日中関係史への反省になってゆくのだが、ものごとの根底を究め、そこから出発されるから強いのだ。ぜし、心して読んでいただきたい一節である。

第一章 長崎貿易は中国貿易

冒頭に「長崎の異国情緒は中国情緒」とでてくる。「雨のオランダ坂」の常識があやしくなりはじめる。

本章では、東海・南海の沿岸貿易圏の一環として日本が存在していたことの、実証的な説明がある。「東アジ



円盤(ディスク)

アの中で「日本」を考えよなどとよくいうが、実際に数字や実例をあげて説明し、納得させてくれる人はきわめて少ない。  
明の滅亡、清の中国支配の完成、それがどのように日本へ響いてくるのか。みごと、長崎へ数字になって表われてくる。日本(幕府)は真剣になってその対応策を考えはじめた。それに対する清の政策。お互い響きあってい



二羽のおうむのいる構図

るのだ。  
また、来日の中国船の実態と輸出される日本産の金や銅の行き先からみても、本当に「日本は鎖国」だったのか、といいたくなるだろう。

## 第二章 禁書 発見

長崎奉行所の書物改役をめぐる「禁書(輸入禁止の書物)」の歴史が描かれる。禁書とはむろんキリスト教関係の書物だが、細かい検閲内容まで説明がある。幕府の徹底した政策と忠実な役人とをみてみると、何やら江戸時代の気がしない。

こういう資料のほとんどは長崎県立図書館にある。長崎奉行所の業務をひきついで県庁が文書も受けつぎ、図書館へ入ったとのこと。江戸時代の日中関係史の宝庫だ。天保年間ごろの文書は明治の初めごろまで現役の文書であったという。

私ごとで恐縮だが、私は数年来、対馬藩の「宗家文書」の調査をしている。倉庫には江戸時代の初めから明治末年までの文書が混然と入っている。明治になっても江戸時代の文書を参考にし、継承すべきこともあったのだ。江戸と明治は切れていない。

第三章 書物 改  
禁書の検閲制度を通して、長崎での書物の入札、値段の解説がある。

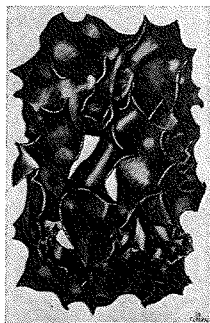
## 第四章 白石と正徳新令と明律

中国船が長崎へ持ちこむ品物の中で書物の占める割合を出し、何と中国の出版事情まで説明がある。南京・寧波船がおもに書物を運びこむが、南京からの航海日数では北京も長崎も同じで、長崎は北京と同じ出版の恩恵を受けていたとある。

特異な日本からの注文に「明律」関係の書物がある。とくに加賀藩主・前田綱紀の寛書意欲は驚くべきもので、不成功に終わるが、執拗なまでの中国船への注文である。一つ大陸先生へプレゼントをしよう。正徳三年(一七三三)、綱紀は対馬藩を通じて朝鮮へ注文を出している。対馬からの返事は「彼方にて随分才寛致し候えども、彼国にて決して相調わず候由申来候」とあって、残念ながら、朝鮮でも手に入らなかった。

## 第五章 暴れん坊將軍吉宗の半面

將軍家の紅葉山文庫の管理をしていた書物奉行の勤務



終(ひいらぎ)もどきの葉

日記『幕府書物方日記』を通してみた、意外な吉宗像が描かれる。吉宗は紀伊藩主のときから学問に執心で明律の校訂に心がけ、將軍となって『大清会典』の和訳を命じた。吉宗が許される範囲で実力主義をとったエピソードや、事務処理能力のあったことなども描かれる。けれども「幕府書物方日記」が、まるで生きているように歴史を語るのには実に面白い。先生のみことというほかない史料の手網さばぎに魅了させられる。

## 第六章 沈燮庵先生の渡航

『大清会典』の和訳に際し清の官吏経験者が必要となり、歳貢生(儒士)であった沈燮庵を来日させた。ところが吉宗は获生北沢(幕府儒者の校訂した『唐律疏議』の



再校訂にあたらせた。『唐律疏議』は中国でも失われていた本である。沈は写本をもって帰国したが、清では「希代の書」として重宝したという。日中共同研究の成果である。また本章では吉宗の蒐書を解説されるが、歴史に造詣深い吉宗が知られる。

### 第七章 象の旅

享保十三年(一七二八)、吉宗の命で象二頭が江戸へ運ばれた。その道中の珍話、出版界での象ブームが描かれる。他の動植物の輸入では水戸光圀が熱心だった。オランウータンやジャコウ猫を注文している。これは私の見た対馬の記録だが、光圀が朝鮮へロバ二頭(社牝)を注文した例がある。

### 第八章 享保のおやとい外人

まず中国人医師が出てくる。これも吉宗の命である。長崎といえはシーボルト・お桶だけではないのである。これも私ごとで恐縮だが、寛文十二年(一六七二)、対馬藩が要人の病氣治療に長崎から医師をよんだことがある。私は紅毛(オランダ)流医師をよんだのかと思っていたが、やっぱり中国流だったようだ。スパイ船(日本事情をさぐる)の話もある。中国がまだ

### 終章 阿片戦争と『海国図志』

『海国図志』とは阿片戦争の敗北に、西洋物質文明の力を認識せねばならぬと考えた魏源の著書で、一八四二年に出版された。長崎へ入ったのは一八五一年である。長崎奉行所の書物改役・向井外記は西洋の記述に禁書と考へ伺いを出した。ところが、江戸では文句なしに「御用書」として至急に届けさせ買いあげたという。幕府上層部の認識は変わっていたのである。

先生は草末に

江戸時代の日中関係を調べているうちに、私は何だか江戸幕府の功績をネグレクトし、江戸幕府を必要以上に悪物に仕立てているのではないかという疑がしてきた。……われわれの日本史の常識は、案外、薩長史観を無批判に受け入れてしまっているのかも知れない。と、のべておられる。全編読み終えると、非常に説得力のあることばとして響いてくる。

本書の帯には「こぼれ話から日中関係史を見直す」とあって、先生は謙虚にひかえておられる。とくに今日のヤマ台国研究のあり方から「ロマン抜き」で江戸時代の事実の正確な復元をめざし、徹底的に文献史料のみで、先生は本書を著わされた。それは本書に出てくる史料と

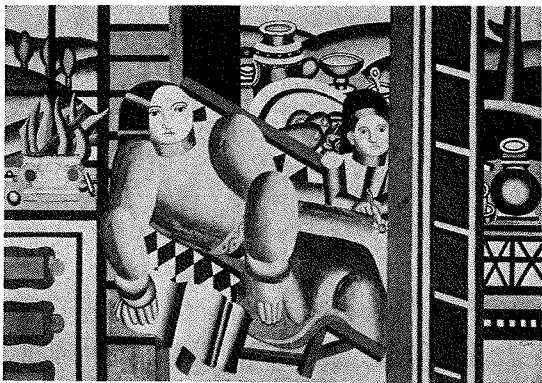
倭寇を警戒していたのだ。

### 第九章 乗り渡し申候船の艦

長崎へくる中国船は出発地により口船(江蘇・浙江)・中奥船(福建・広東)・奥船(東南アジア地域)と分けられていたが、それに対応するように船の構造がちがっていた。南京船(沙船)・鳥船・漕船である。それぞれについてめん密な考証がある。さすが遠くからくる暹羅船になると、外洋船の構造をもち、西洋の技術の影響があるという。命がけの海だけに、それだけの知識と技術があったわけだ。

### 第十章 船頭と船人たち

本章では多くの無名の人々をとりあげ、その事蹟を紹介される。汪竹里という人が「袖海編」という日本紹介の本の中で「東人(日本人)事を好む者、重価を惜しまず、購買什襲して蔵し、毎に汗牛充棟(蔵書の多いこと)に至る。然れども誦説を解せざること商賈賈賈の如し」といっている。江戸時代でも、ツンドク人が多かったのである。先生は、ただ多くの書物が日本へ入ったというだけでは意味がない、日本でそれをどう消化したのか、その質的な研究に向いたいと今後の方針をのべておられる。



女と子供

なつた書名だけでも大変な仕事だとわかる。小倉芳彦氏の推薦文がある。「本書で紹介された諸史料は、われわれの既成の江戸時代像をゆさぶる迫力をもっている」と。まことに簡にして要を得た表現である。先生の力のこもつたご研究に大きな敬意を表したい。

ただ、私のこの拙文でもって、みなさんに先生の業績をじゅうぶんお伝えできるかどうか、はなはだ心許ない。読者諸氏の御賢察を乞う次第である。

最後に。私は友人にすすめて本書を読ませた。きわめてふつうに読後の感想を求めたら、いわく、「ロマン抜ききの歴史には大賛成。だが、大庭先生ご自身はロマンにあふれておられる」と。これまた、いい得て妙な表現であると思う。

(文学部教授・いすみ せいいち)

## 書評

### 深沢七郎『檀山節考』論

#### 深沢七郎の視点

全く異質の世界に接した時、我々はそれに対してはたしてどのような反応を示すのだろうか。ある場合には興味を持ってそれに見入るだろうが、多くの場合、特にその世界と自己との価値観の相違が不快感となつて我々を襲うとき、我々は耐えきれず身を引いてしまふだろう。しかし、人間は自らの価値観ですべてのものを見ることのできて、ではその自分の価値観とはどんなものであるかは、これはなかなか見出し難いものである。そしてあらゆる価値観については相対的なものにすぎない以上、異質の価値観は、ひるがえつて我々自身のそれを検討するさいの、有効な一つの視点となり得るものなのだ。

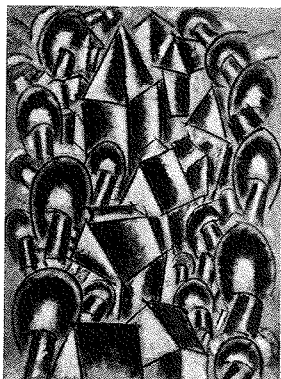
## 江崎 明

深沢七郎の持つ世界は強烈な異和感を我々に持たらず。作家三島由紀夫はこの『檀山節考』を読んで、「何か不定形で、どうどうしたものがある、とても脅かすんだ」としきりに気持ち悪がっていたと聞く。気持ち悪さとは、思いどおりにゆかない感覚であろう。我々の持つ、近代的な人間観、世界観、あらゆる価値観が、彼の世界では通用しない。せつかくの巧みな構成の先走りをするよう作品であり、それは最後まで読まないかわからないのだが、なぜわからないかと言つと、この作品において、 $\Delta$ 棄老 $\nabla$ ということに対しての、作者、もしくは登場人

物の見方が、我々の持つイメージとは著しく異なるからなのだ。主人公はおりんという老婆であり、食料の不足ゆえに七十になった老人はすべて捨てられるという村の掟のもと、彼女が息子である辰平の負う背板に乗せられる「横山」へ捨てられにゆくのが全編のクライマックスをなすのだが、我々の思うようにおりんはそれを恐れたりイヤがりたりしない。むしろ自分から進んで、その時を待ち望んでいる。彼の世界では八乗老Vは、恐ろしいことでも哀れなことでも何でもなく、むしろきわめて当然のことであるようだ。この作品は物語を進めゆく上で、要所要所に地の文章(?)を解説し、さらに文章に解説される形で八歌Vが効果的に挿入される形式をとっているが、たとえば次のような歌に、八乗老Vに対する考え方はよくあらわれている。

塩屋のおとりさん運がよい  
山へ行く日にゃ雪が降る

山へ行くとは捨てられにゆくことであり、雪の中に捨てられた老人は雪の降らない日に捨てられた老人に比べ、「運がよい」というのだ。さらにこの歌は、老人を捨てる時には雪の降る冬に捨てにゆけ、という暗示



樹のなかの家々

辰平の先妻について語られるのはこの箇所のみである。それだけではない。このおりんの孫のけさ吉という十六の少年が嫁を貰うと言い出し、連れて来た娘が子供を孕んでいると知れた時、つまりおりんには曾孫となるのだが、食料の乏しい村では曾孫を見ることは「多産や早熟の者が三代続いたことになって嘲笑」されるので、彼らは次のように話し合う。

玉さんが石臼をひくのを止めて  
「いいよ、ねずみっ子が生れたら、わしが裏山の谷へ

をも与えていると言う。いずれも、八乗老Vを避けられぬ必然の前提とした上で、つまり長く苦しまず死ぬ、ということを考えて言うのだろう。たしかに、八乗老Vが絶対に避けられないものであり、その死が仕方ないものであるなら、苦しみは短かい方が良いが、しかし我々にはこのように割り切ることができない。現代においてもたとえば「安楽死」の問題について、我々はまだ明確な解答を見い出してはいないのだ。深沢七郎は、人間は死ぬことが仕事だ」と発言しているが、確かに彼の世界においては、人間の死は、さして重大なことでもないかのようだ。物語のはじめに、おりんとその家族が紹介される際、次のような文章がある。

おりんは今年六十九だが亭主は二十年も前に死んで、一人息子の辰平の嫁は去年栗拾いに行った時、谷底へ転け落ちて死んでしまった。後に残された四人の孫の面倒を見るより寡夫になった辰平の後妻を探すことの方が頭が痛いことだった。

「谷底へ転け落ちて死んでしまった」——一人の人間の死が、ここではたったこれだけの言葉で片づけられ、何の感情の起伏もなく文章が続いている。後にも先にも行つて捨ててくるから、おばあさんはかやの木のうちみたように歌にゃならんから、大丈夫だよ」  
そう云うとけさ吉が負けん気で  
「コバカー、俺が捨ちやってくらア、ゆぎゃアねえ」  
ゆぎゃアアねえということは、何んでもないという意味である。

これは一体どういうことであるのか。我々の持つ生命の尊厳という観念からは、およそ肌粟立つような会話である。しかし、それなら、「生まれた子供を捨てる」



グランド・パレード

ということと、「生まれる前の子供をおろす」ということとは、はたしてどう違うのか。我々の社会では、生まれた子供を殺すと殺人となるが、墮胎は逆に優生保護法という法律により組織的にさへ行なわれている。結局同じことではないのか。けれども、八棄老Vの場合と同じく我々はここでやはり何かしら割り切れない。墮胎と、実際に生まれ、泣き声さえあげる赤ん坊を殺すのとは別だと思いたい。

また、恋愛や結婚についても、おりんの息子の辰平の後妻をむかえること、孫のけさ吉が嫁を連れてくることによって、この世界での見方が語られる。

後家は辰平と同じ年の四十五で、三日前に亭主の葬式がすんだばかりだそうである。年恰好さえ合えばそれできまってしまったと同じようなものだった。飛脚は後家になったものがあることを知らずに来たのだが、嫁に来る日までをきめて帰って行った。

玉やんが来て一と月もたたないのに、又、女が一人ふえた。その日、池の前の松やんは根っこに腰をかけていて、昼めしのとときにはおりん達の膳の前に坐り込んでめしを食べたのである。

そして、盗人の家が「家探し」され、さらに盗んだと見られる大量の食物が発見されると、村じゅうが殺気だつた。

それから三日目の夜おそく大勢の足音が乱れ勝ちにおりんの家の前を裏山の方へ通って行った。雨屋の一家が村から居なくなってしまったのが村中へ知れわたったのは、その翌日のことだった。

「もう雨屋のことは云うではねえぞ」という村中の申し合せがあって、誰も噂をしなくなつた。

これらは、土着的な村落意識、とでもいうべきものであらう。いずれ近代以前のものである。

深沢七郎がこのような世界を、その荒けずりでそのくせ妙に生々しい文章と歌とで我々に語るとき、我々は不安にかられ、我々自身の視点というものをまた再検討せざるを得ない。我々は近代的な人間中心主義の立場に立つと信ずる。戦争どころか、その旋跡さえ知らず、高度成長期に生まれ、一貫した民主主義教育を受けた我々は、ヒューニズムという言葉が恥ずかしくて使えないほど、逆にかえってその中にどっぷりと身を置いてい

突然、食事の際に人間が一人増えていて、それで嫁に来たということになってしまふらしいのである。近代小説は恋愛を大きなテーマの一つとしてきた。また我々は結婚というものを、人生における重大事の一つと見ている。しかし、ここでは人間は犬や猫をつがいにするのと変わりなく、実に簡単に結びつけられてしまふ。

では、この世界において、人々が絶対の価値を置くものは何か。それは、八食べものVであるようだ。一つの社会における生活意識は、スラングや悪態などに端的にあらわれてくるが、「めしを食わねえぞ」、「めしを食うな」という言葉が、おりんのいる村では悪態として使われる。八棄老Vもまた、食料の不足ゆえだった。さらにその貴重な食料を盗んだ人間へは、容赦のない集団的な暴力がふるわれる。

盗人は雨屋の亭主であった。隣りの焼松の家に忍びこんで豆のかますを盗み出したところを、焼松の家中の者に袋だきにされたのであった。

食料を盗むことは村では極悪人であった。最も重い制裁である「楡山さんに謝る」ということをされるのである。その家の食料を奪い取って、みんなで分け合つてしまふ制裁である。

る。そのはずだ。そして対置して深沢七郎の視点は近代以前の土着的全体主義、とこのように図式化してしまえると案なのだが、けれども、私は最近、花田清輝の『復興期の精神』のなかに、次のような文章を見出し

ヒューニズムの持つエモーションナリズムの一面が誇張され、人間的であることと、人情的であることが混同されているこの頃、ヒューニズムの排撃は、たしかに必要なことにはちがいない。

深沢七郎と我々と、はたしてどちらが本当のヒューニストなのだろうか？

〔国文学科〕回生・えさき あきら

ボードレールとパリ (その二)

山村嘉己

1

ボードレールがパリを歌うべく心にきめたとき、かれが閉じたもった仕事部屋は、むしろ、**「空近くの」**密室であったことはすでに述べた。かれはそこから自由に**「魂」**を出入させ、パリの街の**「魂」**を裸にすることに成功した。散文詩集『パリの憂愁』の「二重の部屋」はそのかれの仕事部屋のあやしい雰囲気を次のように伝えている。

夢想に似た部屋、まさに精神的な部屋、そこではよ

品など冒瀆にすぎない。ここにあるのはすべて調和の、みちたりた明るさと甘美な暗さばかり。

比類なく微妙な微妙の香りが、僅かな湿り気を帯びてこの大気のなかにただよい、精神は温室にいる感覚にゆすぶられてうっとりまどろむ。

これは「旅への誘い」にも描き出されているボードレールの理想の雰囲気であり、かれの詩作の理想はまさしくこの雰囲気の中に読者をひき込むことであったが、この調和にみちた平和はけっして永続きしない。

ところが、恐しい重苦しいノックが戸口に響きわたった。地獄の夢のように、私は胃の腑につるはしの一撃を受けた気がした。

それから「幽霊」が入ってきた。それは法律の名において私を虐げに来る執事か、貧しさを訴え私の生活の苦しみにつまらぬ自分の生活までおしつけようとやってくる恥知らずの情婦か、あるいはまた、原稿のつづきを催促する新聞編集長の走り使いだ。

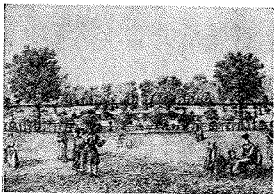
菜園の部屋も、偶像も、夢の女王、偉大なルネのいう「空氣の精」も、あの魔法がすべて「幽霊」の荒っぽい一撃に消え失せた。

どんだ空氣がかすかにバラと青とに色づいている。そこでは魂は怠惰な浴みを試みる、ほのかな悔いと欲望とを匂わせながら。それは薄明に似たもの、ほの青く、バラ色に洗むもの、日蝕の間の官能の夢。家具はながながと、けだるく、ものうげな姿をとる。夢見る風情だ。植物や鉱物のような眠りの生活を送っているというべきなのか。織物もひっそりと、しかし何かを物語る、花のように、空のように、また沈む陽のように。

壁にはおぞましい飾り物など少しもない。純な夢、生の印象にくらべれば、形ある芸術品、手にとる芸術

ここでは詩の調子までが一変していることに注目願いたい。かれが「永遠」の至福とまで名づけた理想の世界が無惨にも砕け、白々しい現実がむくつく顔を出すのである。この現実、つまり「幽霊」とは何であったか、それはいまでもなく「時間」である。

ああでうだ！「時間」がまた現われたのだ。今や「時間」は主君として君臨する。そして、このいやらしい老人とともに、「追憶」、「後悔」、「癡癡」、「恐怖」、「苦悶」、「憤怒」、「神経症」などの悪魔の行列

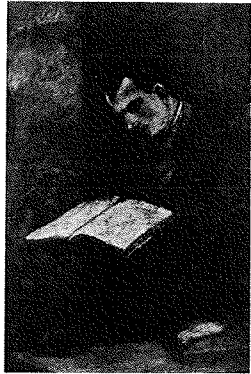


リュクサンブール公園

がすべて立ち返ってきた。

まちがいないといえるが、今や一秒一秒が力強く厳かに刻まれ、その一秒一秒が振りから飛び出してきてはくり返すのだ。「俺こそ「人生」、堪えがたい、仮借ない「人生」なのだ」と。

もともと、「時間」はボードレールにとっては宿命的な「苦惱」の根源であった。◀「時間」は人生を喰う◀という句で有名なあの「仇敵」の一篇を筆頭に、『悪の華』はこの主要テーマのヴァリエーションで埋まっているとすらいえるものであった。その意味では『巴里の憂



読書するボードレール

話すすべてのものに、これらすべてのものに尋ねたまえ、今は何時かと。すると、風は、波は、星は、鳥は、時計は答えるだろう。◀今は酔うとき。「時間」に虐げられる奴隷とならないために、たえまなく酔っていたまえ、酒に、詩に、徳に、何であれ諸君の心の赴くままに」◀

それはついには爆発的に「Anywhere out of the world」と叫ぶまでにいたる。ここにわれわれは、四十を過ぎて急に肉体の衰えを感じ、しかも溢れるような種々の計画への夢につき動かされて、「もう遅すぎるのではないか」と憂慮するボードレールの焦立ちを十分感じることができる。かれの『心の日記』にこの辺の事情を物語る章句を見出すことはきわめて簡単なことである。しかし、一方、半ば「No」といえる要素がなくもない。それは『悪の華』にも少しは見えていたかれの「醒めた目」が―それを批評的精神とか、イロニーとかいうこともあるが―ますます明瞭にこの『巴里の憂愁』には見てとれるという点である。「時間」の仮借なきをさらにつよく感じつつも、かれはそれを突き放して描きぬくことによってその仮借なくいきから脱け出ようとしていくというのである。すでに「散文詩」を書くという行

愁もまた同じテーマの飽きもせぬ繰り返してしかなかったであろうか。そして、それまでのボードレールのすべての試みがそうであったように、この「仇敵」を逃れようとする偉い努力をまたまた一つつけ加えただけにすぎなかったのだろうか。

その答えは半ば「Oui」である。50に及ぶこの散文詩集にも、あいかわらず、時間よりの逃亡を願う詩はいくつも見られ、その願いはむしろさらに熾烈とすらいいうものになっていくからである。たとえば「酔っていたまえ」を見ればよい。

いつも酔っていないければならぬ。すべてはそこにある。それこそがたった一つの問題なのだ。諸君の肩をひしぎ、地べたへと押しつける恐るべき「時間」の重荷を感じないためには、諸君は休みなく酔いつづけねばならぬ。

しかし何に。酒に、詩に、あるいは徳に、何であれ諸君の心の赴くままに。それでもとにかく酔うことだ。そしてもし、宮殿の階の上でも、濛の緑の草の上でも、淋しい諸君の部屋の中でも、時に、酔いもさめはて、目ざめたときは、風に、波に、鳥に、鳥に、そして時計に、つまりは逃れ去り、呻き、転々し、歌い、

為がその試みの一端であった。たとえば韻文の名詩「旅への誘い」をわざわざ散文詩に書きかえたとき、その一種淡々とした散文詩の書き出しを見て、そのボードレールの醒めた意識を、そして、あえていえばその醒めた意識を表立てようとするかれの悲壮な心根を、そこに読みとろうとすることはあまりにも思い入れのすぎた考えであらうか。絶唱ともいへべき

わが子よ わが妹よ 思ってもみてごらんかしこに  
行き、ともに生きるこの案じさ！

をあえて押えきり

昔なじみの女友達と訪れたいと夢見るすばらしい国がある。人のいう「豊饒の国」だ。

と、平静に切り出したときのかれの意識の切り換えに注目したいと思うのである。そして、この転換(一)に成功したかれの視線はたとえは自らの内に向けられたときも、一種の清明さを帯びて輝いてくることをわれわれは無視できない。

すべてに不満で、自分にも不満わたしは、この夜の沈黙と孤独のなかでせめて少しは身をつくらない、ちょっと誇りを持ちたいと思う。わたしが愛した人たちの魂よ、わたしが歌った人たちの魂よ、わたしを力づけ、支えて下さい。この世の偽りと腐った空気がわたしを離して下さい。そして、あなた、わが救い主神様よ、わたしが人間のなかで最悪のものでなく、わたしが軽蔑する人たちよりはまだまだましだということ、自分で自分に証明できる美しい詩を、せめていくつか作り出すようお恵みを垂れて下さい。(午前一時に)

この眼は同様に他人に向けられるときも、些かイロニイは含みつつも同じ縁かさをたたえることがあった。「黄昏」とか「孤独」かにはそれを感じさせる何ものがある。ここでは「すでに」を例としてあげておこう。

すでに百たび、太陽は輝かしくあるいは悲しげに、その果てもほとんど見えぬ海の巨大な氷桶から墜り出たことであった。また百たび、それは時にはきらびやかた時にはどんより、夕べの巨大な浴槽に身を沈めたことであった。もう何日も前から、われわれは反対側の大空を眺め、対極の空のアルファベットを解説する

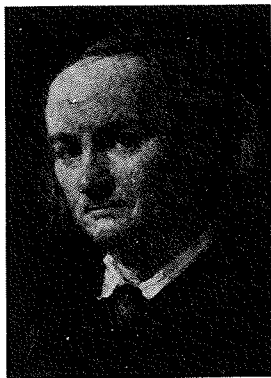
家庭のことを考える人もあった。不実なふくれっ面の女房を、うるさい子供たちのことを思う人もあった。みんながそこない大地を思っただけ夢になっただけから、草だって動物以上に貪りくったかも知れぬと思われほどだった。

ついに、岸が見えたと報じられた。そして近づくにつれてそれはすばらしい、目くるめく大地だと分った。生命の音楽がそこはかとなさわめきとなって立ちのぼり、くさくさの緑いっばいの岸辺から、数里四方に、花や果実の甘い香りが溢れ出ている。



テュイルリーの音楽会

ことができた。船客はそれぞれ呻いたり唸ったりしていた。陸地が近づけば近づくほどかれらの苦しみは増すようだった。「いったい、いつだ」と、かれらはいった。「いつになったらわれわれは、波の上で揺られわれわれ以上にいびきをかく風に悩まされずに眠れるようになるのだろうか。いつになったらわれわれは、このわれわれを運ぶ汚い水のように塩からくれない肉を食べられるようになるのだろうか。いったいいつになったらわれわれは、どっしりした安楽椅子で食べ物を消化できるのだろうか。」



ポードレール

たちまちなんは愉快になり、不気嫌を捨て去った。喧嘩のことなどこへやら、お互いの過ちも水に流した。決闘の約束もすっかり忘れ、怨恨は煙と消えた。ただわたしだけは悲しかった。思いもかけず悲しかった。神性を奪い去られそうな司祭に似て、わたしは胸をつきさす苦しみに海を離れることはできなかった。恐ろしいばかりの単純さのなかで無限に変化する海、昔生きた、今生きた、未来も生きるだろうすべての魂のいろいろな気分、苦悶、恍惚を包みこみ、自らの動き、怒り、笑いによってそれらを写し出しているようなその海を。

この比類ない美女に別れを告げながら、わたしは死ぬほど打ちのめされた感じがしていた。だからこそ、航海の道連れがそれぞれ「やっとー」といったとき、わたしはただ、「もうすでに！」としかいえなかったのだ。

しかし、それは大地であった。まぎれもなく、さわめきと情熱と生活と祝祭とをもった大地であった。われわれに薔薇と麝香の神秘的香りを送り、生命の音楽が愛のささやきとなって届けられる、豊かで壮大で希望にみちた大地であった。

これがポードレルの晩年にいたりついた人生の姿ではなかつたらうか。そして粟津則雄氏も正鶴に指摘しているように(講談社版「ポードレル詩集」P. 229)これはまた『パリの憂愁』の詩境においてははじめて可能となった世界であった。

したがって『パリの憂愁』にはパリ風景なるものはほとんど姿をあらわさない。しかし、いざさか開き直って、散文の形でぶつけられるこうしたポードレルの心象風景の奥に、われわれはかれにその心象風景を描かしたパリの姿を、そしてさらには、それに重なるように近代人の根源的な存在条件を、まるで二重、三重写しの陰画のように感じることができるのである。

―追記、ここでさらにくわしくポードレルの散文詩の技巧について分析を試みたのだが、私的な都合で思いを果さなかつた。また機会を改めて述べてみたい。

なお、このポードレル研究余瀆は、わたしの翻訳の試みの発表でもあるので、引用文としては長すぎる場合が多いが、その点御諒承願いたい。そして訳し方などについての批判をお寄せいただければわたしの喜びこれに過ぐるものはない。

(弘文学科教授・やまむら よしみ)

## 日本中国

### ことばの来往 その3

芝 田 稔

#### 方言音のいたずら

中国は広大な国土を有しているので、多くの方言や方言音がいまなお頑固に幅を利かしている。同じ漢民族であっても、北方育ちと南方育ちとはもちろんのこと東と西とでも、いやそれどころか、南方では同じ県内の住民同士でさえ川一つ隔てると、ことばが通じにくいというところがあるほどだ。だから、中国の現地でその土地の人から聞き覚えに学んだ中国語には、土語のもつ親しみはあっても、標準語音のように普遍性はない。大雑把にいって、北京以外の現地で中国語を正式に学ぼうと

すれば、現地音と北京音との二重の責めを負うことになるのである。ここで、方言音のいたずらを一つ。

「キンテン・テンキー・エアー」——今日は(天氣が)暑いネ——中国は東北の真夏、揮汗の底に当る露天堀の切羽では特に暑い。見回りに降りて行くと、汗だくの採炭夫たちから、よくこんなことばがかけられる。幾日もつづけて、同じ場面で同じことばを聞かされると彼らの意思が自然に理解されて来る。ことばを覚えるには、それで事足りるのであるが、漢字を国字とするわれわれ日本人は、そのことばを漢字に置きかえてみないと安心できないし、また自信がもてないのである。そこで字の



判る中国人に頼んで、覚えただけのことは漢字を当てはめてもらうのである。

「今天・天気・熱」——書かれた文字をよく見ると、「暑い」を「熱」と書くのはまあまあとして「ネツ」と読むところが、英語の「空気」と同じ「エア」これは一寸外国語らしい、臭がするが「今天・天気」の方は、全く日本語の「漢音」と同様である。さらに、現場では唯一の飲物としている白湯のことを「エアースイ熱水」とも「カイスイ開水」ともいう。とすれば、もうしめたものだ。ほとんど日本語でこなせるではないか。こんな小さな発見に気をよくした私は、中国語は「組し易い」ことばだと高聲をくくることになったのである。

だが、これは方言音のいたずらであり、私はそれに騙されていることに気がつくまで、それほど時間はかからなかった。というのは、先に述べた「白帽子事件」がきっかけとなって、私は否応なしに中国語を勉強させられることになったからである。最初に入った語学校の教師は、北京から招聘されたという満洲旅人であり、この老先生の玉ころがすようになめらかな「北京官話」は私が抱いていた「組し易い」中国語の夢を、一べんに吹き飛ばしてしまったのである。

先に覚えた「キンテン」は、先生の前では通じない。

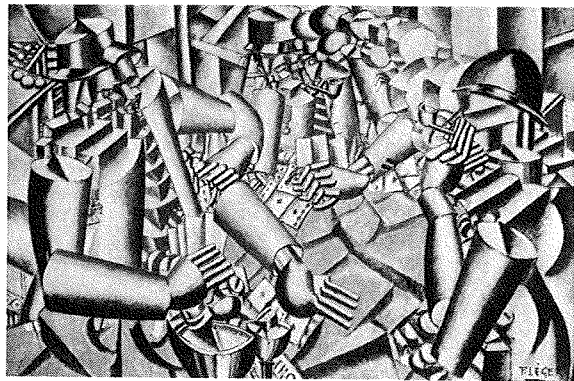
「チンティエン」と、きつく矯正される。「テンキー」も「ティエンチー」に。そして「エア」覚えこんだ「熱」は、生れて初めて耳にする捲舌音の「ロー」。こんな音がどうして出るのか、不思議でさである。それだけに苦労したものだ。簡単にいえる「スイ水」も同じ捲舌音の複雑な「シウェイ」。中国語はやはり外国語だと思いついたのは、その時からであり、以後東北にいた三年間、学校では北京語音を、現場では方言音を操るという二重の苦を負うことになったのである。因みに、ここにあげた方言音は、現場労働者の出身地から推して山東半島の北部および東北遼寧の地方音が混在していることを付言しておく。

### ロバと「入声」

北京語音には「入声」がない。中国語を学んだことのあるものなら、誰もがこれを信じて疑わないのである。判り易いえば、入声はつまる音だが、これが北京語音にはないのである。例えば、北京の人は「北京」のことを「ペイチン」となめらかに抑揚をつけるが、本来「北」の字音は入声である。去る九月に本学を訪問された安徽省出身の歴史地理学者黄盛璋先生は、それを「ボォキン」で通された。つまり「北」の語音が短かくつま



閑暇(ダヴィットへの讃美)



トランプの試合

るこれをローマ字で示せば音尾に子音のkがくっついているからである。序に言えば、このほか音尾にp法、給、合などおよびt(発、達、実など)がくっつく字音は全て入声であるが、現代の北京語音はこれら音尾の子音がぬけ落ちてしまったのである。

ところが、中国語を学んでから七年目、ところも變つて北京でのこと。大学一年「声韻学」最初の講義で、担任の趙陸堂先生がいわれるに：「北京にはただ一言だけまだ入声音が残っている。それを街で搜してみよう——これが宿題であった。異なことを聞くと好奇心も手伝っ



多彩色の潜水夫

て、当座は通学の途中や遊びに出かけた時でも、氣をつけ合つて入声捜しをしたものである。だが、それが草臥れ儲けに終つた後は、もう宿題のことさえ忘れていたのである。翌年最終の時間になつて：「誰か入声を聞き出したものはいないか。誰も答えるものがない、と判ると、趙先生は入声について詳しく説明され、北京でも活きつつづけている。その入声を明かされたのであつた。いわれてみれば、なあんだ「コロンスの玉子」ではないか。この入声ならば、中國人学生で知らないものはいないか。私でさえもとくに知つていた音である。ただ、その音を「声韻学」という言語科学の中に、きちんと位置付ける術を知らなかつただけである。しかも、その入声たるや、人間同士のコミュニケーションには出て来ないのだ。この音を聞き分けることのできる相手といへば、それは馬やロバの類である。「ほくは馬じゃない。氣付かないのが当り前だ」なんて陰口をたたく馴れた学友もいた。こんなわけで、宿題はできなかったが、この一件から、研究とは、学問とは？ その一端を実地に教つたような氣になつたのである。

ところで、問題の「入声」——これは馬車や荷車の馬方が馬やロバに対して出発を命じる時のあのかげ声、馬言葉の「ドォ」口へんに得」なのである。

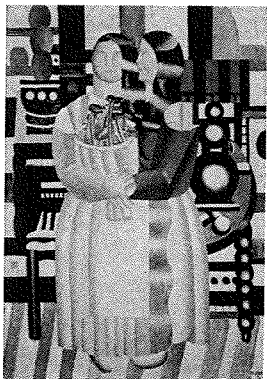
余談になるが、その反対に動いている馬を止めるには「ユイ、ユイ」呼々」と重々しく怒鳴ればよい。ただ、馬やロバの類は主人には忠実であっても、他人のいうことはきかない、中でもロバの根性悪には閉口したことがある。中国北方の田舎では、畑に井戸水を汲み上げてい

るロバの風景をよく見かける。主人がそばにはいなくともその命令通りに、黙々と働く。汲み上げ機の心棒を腕に結付け、目隠しされて、只一途に井戸の周囲を、同じ方向同じ速度で歩き回っているのだが。汲み上げられた水は種を伝つて畑の畝間を少しづつ潤して行く。ある時、こんなに働いているロバに向つて「ユイ、ユイ」を試みた。するとロバは主人ならぬ私のいうことを素直に聞いて、ビタリと脚を止めた。馬言葉が通じたのである。

そこまではよかつたのだが、汲み上げ途中の水はザアザア井戸に落ちるし、畝間の水は流動しない。見る見るうちに水は畑に吸ひこまれてしまう。これは大へん、あつて「ドォ」「ドォ」とやってみたが、今度は通じない。何回やつても知らぬ顔だ。「えーい」とばかり、そこらの土くれを尻にぶつけたが、ビリッとも動かない。思い余つて尻を押しに行くとな後脚で蹴ってくる。全くお手上げだつた。そこへ事を知つた農夫が飛んで来て、かげ声も荒々しく「ドォ」。この一言で、この騒ぎは治ま

つたのであるが、後日、談ひとたび入声に及ぶと、このロバの姿が浮んでくるのである。(つづく)

(中国文学科教授・しばた みのる)



信 頼

## 北京で生活して(二)

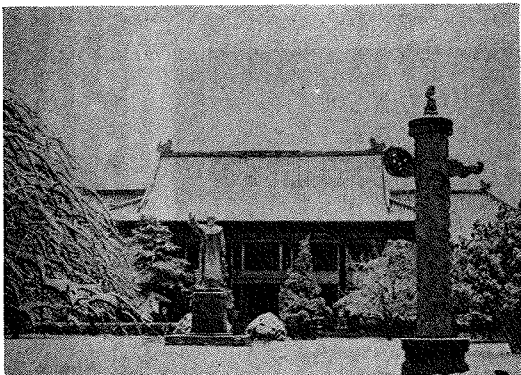
鳥井克之

北京大学  
〔文科系学部〕  
○中国言語文学部：中国文学科、中国言語学科、古典文献学科の三学科で構成されている。徳育、智育、体育の面でいずれもすぐれ、思想面でも専門分野でもしっかりとした、文学、中国語、漢籍整理の教学、科学研究およびその他の関連のある専門の人材を養成する任務を担っている。学業年限はいずれも四年間で、古典文献学科は年度によっては学生を募集しないこともある。

中国文学科：中国では、文学は上部構造に属するイデオロギーの一種であり、階級闘争の有力な武器であると考えられている。したがって、マルクス主義の基本原理によって、文学領域における現実的な状況や各種の文学思潮の闘争を研究し、文学発展の歴史を研究し、文学の製作と文学の発展の法則を明らかにするように指導している。また、わが国の文学活動の繁栄と発展を促すことを通じて、社会主義革命とその建設に貢献するように指導している。

中国語学科：中国語は中国において主要な言語であり、また世界で使用する人が最も多い言語でもある。中国語は歴史が長く、方言が複雑であり、文献資料が豊富である。このため、中国語の研究はそれ自体についてみると、また言語学の理論に対する貢献およびその他の学問（たとえば文学、歴史学、考古学、文献学など）に対する影響について論じても、いずれも重大な意義をもっている。今世紀内に四つの現代化を達成するとういう、中国の新しい時期における総任務は、言語学にたずさわる者が中国語の現状と歴史に対して、広範で深く掘り下げた研究を展開するように要求している。そのうえ、中国語の規範化、漢字の改革、標準語の普及、中国語の教育研究および辞典の編纂などの一連の重要な実地的な活動に貢献することを求めている。

この学科の学生は、政治に関する科目および外国語などの教養課程の必修科目を履修する以外に、現代中国語文法、古代漢語、言語学概論、音韻学、方言学および方言調査、中国語の歴史などの専門基礎科目を履修しな



北京大学西正門に入ったシンボルゾーンにある主楼(講堂と大学本部)

ればならない。この外に、高学年になると選択必修科目や専門テーマに関連する科目を履修しなければならぬ。

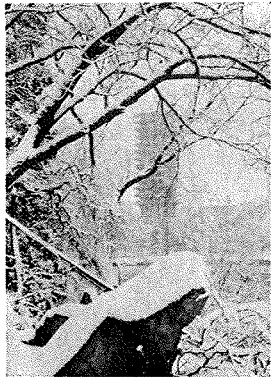
○歴史学部：歴史学はマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を運用して、中国と世界の歴史を研究し、人類社会発展の法則を明らかにし、中国の革命とその建設および世界の人民の革命闘争の経験を総括し、四つの現代化達成のために奉仕するものである。考古学は歴史学の重要な構成要素であり、それは悠久な、きわめて豊富な古代物質文化の遺産および遺物に対する分析を通して、歴史を考証し、研究するものである。北京大学歴史学部には中国史、世界史、考古学の三学科が設けられており、修限年限はいずれも四年である。

中国史学科：この学科は中国歴史の教学と科学研究の人材およびその他の史学関係者を養成することにある。主要な科目としては、哲学、政治経済学、中国通史、世界通史、中国史料(文献学)、外国語などがある。三年次生より専門テーマごとの科目と選択必修科目が設けられる。たとえば、隋唐史、宋史、辛亥革命、第一次国内革命史といった、時代ごとに区切った歴史を研究する科目や、農民戦争史、中国西洋交通史、中日文化交流史といったテーマ別の講義、さらには時代区分に関する討論を主とした研究などが行なわれる。

世界史学科：この学科は世界史の教学と科学研究の人材およびその他の史学関係者を養成する。主要な科目には哲学、政治経済学、世界通史、中国通史、外国史レファレンス・ブック使用法、外国語などがある。四年次生になると、専門テーマ別の科目と選択必修科目が開講される。たとえば、ラテン・アメリカ史、アフリカ史といった地域別の歴史や日本史、イギリス・ソ連史といった国際労働運動史といったテーマ別の講義などが行なわれている。この学科の学生には、一定の外国語の基礎学力が要求されているので、外国語学部と基本的に同程度の試験が行なわれている。

考古学科：この学科では考古学の教学と科学研究をする人材およびその他の考古学関係者を養成している。主要な科目として哲学、政治経済学、中国通史、世界通史、中国考古学、考古技術、外国語などがある。なお、旧石器時代の考古に関する専門テーマの講義や古文字学、古代建築などの選択必修科目などがある。また専攻生は一定期間、フィールド・ワークに参加して、考古学の教学実習および専門テーマの実習を行なうことになっている。このため、色盲(色弱を含む)の者は専攻生として採用されないことになっている。

○哲学部：哲学科が設けられている。マルクス主義哲学はマルクス主義のすべての学説の理論的基礎であり、中国共産党が戦術と戦略を制定する上での理論的基礎となっている。マルクス主義哲学はプロレタリア世界観の理論体系であるばかりでなく、科学的方法論でもあり、四つの現代化を達成する過程において、普遍的な指導的意義をもっている。修業年限は四年であり、德育、智育、体育の面で均等的に発達した、専門分野での学識を有すると共に思想的にもしっかりした、哲学研究、哲学教学、理論宣伝における人材を養成している。



雪景色の中にそびえる多重塔  
(実は給水塔)

開講されている科目には、中国共産党史、政治経済学、マルクス主義哲学原理、共産主義運動史、マルクス・レーニン主義哲学論文選読、毛主席哲学論文選読、自然弁証法、毛沢東哲学思想特定テーマ研究、中国哲学史、ヨーロッパ哲学史、アジア哲学史、自然科学基礎、形式論理学、一般心理学、外国語、体育など必修科目がある。さらに学生がそれぞれの分野での知識と学力を高めるために、現代プロジェクティブおよび修正主義哲学批判、美学、弁証法的論理学、数理論理学、外国哲学史、自然科学概論、中国哲学史特定テーマ研究、宗教学、無神論などの選択必修科目および特定テーマ科目などを設けている。なお、学生の研究能力に対する訓練を強めるために、学生が積極的に学術活動に参加するよう呼びかけており、教員の指導を受けて、課外研究活動を行なっている。高学年になると、学年レポートや卒業論文を書くことを要求している。そうすることによって、学生が卒業する時には、初歩的な科学研究をする能力と独立して活動する能力を体得させるようにしている。

○経済学部：この学部には政治経済学科と世界経済学科の二学科が設けられており、修業年限はいずれも四年である。

政治経済学科：政治経済学はマルクス主義の三構成要

素の一つである。その任務は社会的生産力と上部構造と結びつけて、各社会制度の生産関係（これが社会の各種の関係を決定づける基本的な関係である）とその発展の法則を研究する学問である。マルクス主義政治経済学は、プロレタリア階級が革命と建設に従事するうえでの理論的基礎であり、また、その他の経済科学（たとえば部門経済学、管理経済学、技術経済学など）の理論的基礎でもある。政治経済学を学習・研究することは、中国の社会主義革命と建設にとって、また、経済法則ののちとって事を行ない、経済管理をうまく行なう上で、さらには、中国の四つの現代化事業を進展させる過程において、いずれも重大な理論的および実践的意義をもっている。

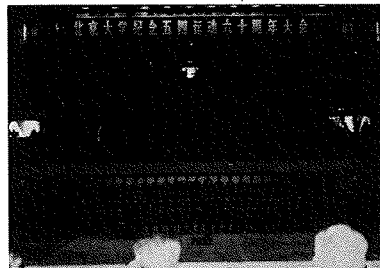
この学科では、専門分野での学識を有すると共に思想的にも確固たるものをもった、マルクス主義政治経済学の理論研究、宣伝、教学を行なう人材を養成することを目的としている。この人材養成の目標の要求にもとずいて、四年間の在学中に次のような基礎科目や専門科目を履修することになっている。すなわち、資本主義以前、資本主義、社会主義の各時期の政治経済学、哲学、中国共産党、共産主義運動史、資本論およびマルクス・レーニン主義、毛主席政治経済学論文講読、経済学説史、現代ブルジョア経済学説、中国および外国の経済史、世界

の任務はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の指導のもとで、第二次世界大戦後の世界経済の情勢とその発展変化の特徴を研究し、中国の社会主義革命と建設、四つの現代化達成のために奉仕し、プロレタリア世界革命事業のために奉仕することである。四つの現代化達成を速めるためには、世界経済の研究を強化し、外国の経済発展の状況と経済建設および经济管理の面における経験を真剣に理解し、外国のすべてのすぐれたものを学んで、それを中国のために役立たせて、中国国民経済の発展速度を速めなければならない。世界経済の研究を強化することもまた、マルクス・レーニン主義の理論建設に欠かすことのできないものである。当面する世界経済の現実の中には、多くの新しい現象や問題が出現し、我われがマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を指導理念として、それに対して科学的な総括と説明を行ない、理をかせた様ざまなブルジョア階級と修正主義の経済理論と観点に批判を加えることを求めている。

この学科では徳育、智育、体育において全面的に発達した、マルクス主義の世界経済の研究、教学、宣伝を行なう専門の人材を養成している。開講科目は政治経済学、哲学、共産党史、資本論、世界経済概論、外国経済事情、国際金融、国際貿易、外国経済史、外国経済地理、

経済概論、部門経済学、統計学、会計学など。この外さらにいくつかの特定テーマ研究の科目や選択必修科目を高学年の学生のために開講している。四年間の勉学中に、一種類の外国語について、外国の専門文献や新聞雑誌が読める能力をつちかうことが要請されている。

世界経済学科：世界経済は新興の学問であり、マルクス・レーニン主義社会科学の重要な構成要素である。そ

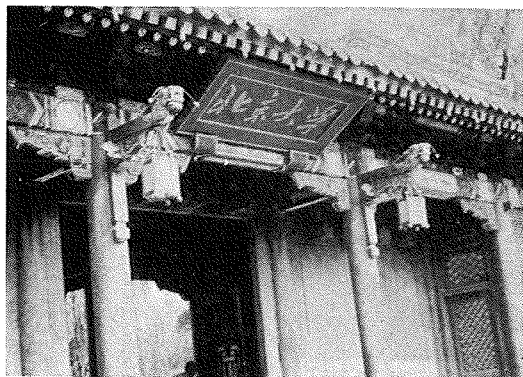


18,000人収容できる首都体育館で開かれた  
北京大学54運動60周年記念集会

現代ブルジョア経済学説、ブルジョア統計資料分析などがある。この外、高学年の学生のために、特定テーマ研究や選択必修科目が設けられている。この学科では、より高いレベルの外国語の語学力が要求されており、少なくとも一つの外国語について、その専門的な書籍や新聞雑誌を閱讀し翻訳できる能力をそなえることが求められている。なお条件のあるものは第二外国語を選択必修することができ、このため、入学時には、外国語学部と基本的に同一水準の外国語試験があり、それによって、ある一定の外国語の基礎をもつ学生を採用している。また、理論を實際と結合させるといふ原則を貫くため、学生は在学期間の一定の時間、外国と関係ある業務の部門へ実習に行き、教室での講義と結合して学習することが要求されている。

○法学部：法律学科と国際法学科の二学科があり、修業年限はいずれも四年間である。

法律学科：この学科の任務は徳育、智育、体育の面で全面的に発達した、法学の研究、教学および法律に関係する仕事に従事する人材を養成することである。卒業生は主として法学の教学、科学研究あるいは法制的実務に従事している。林彪と「四人組」が社会主義的民主を破壊し、社会主義の法律制度を踏みにじったことにより、



毛主席の手による扁額の掛けである北京大学西正門

中国の法律制度の建設は深刻な損害をこうむった。いまや中国は社会主義建設の新しい発展の時期に入り、この新しい時期の総任務を実現するため、華国鋒同志をはじめとする党中央は、社会主義の法律制度を強化する必要を提起した。この事は大学・高等専門学校の法学部は法学の専門家となる人材を出来るだけ速く、出来るだけ多く養成し、法学に対する研究活動を大いに展開しなければならぬ、ことを意味している。また、中国における社会主義の法律制度をたえず完璧で健全なものにし、人民の権利を保証し、プロレタリア独裁を強化し、四つの現代化達成を速めるために、それ相応の貢献をしなければならぬことを要求している。

主要な科目としては、中国共産党史、哲学、政治経済学、マルクス主義主要論文講読、法学概論、中華人民共和国憲法、中国法制史、中国政治法律思想史、外国法制史、欧米政治思想史、民法、婚姻法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、刑事捜査法、国際法、国際私法、プロレタリア政治制度、ブルジョア法学理論、中国語、外国語、論理学、体育、労働などがある。学生の知識を豊かなものにし、学生の異なった要望に応えるため、環境保護法、自然科学講座といった選択科目をも開講している。また、教学の場で理論を実際と結びつけるという原則を貫徹さ

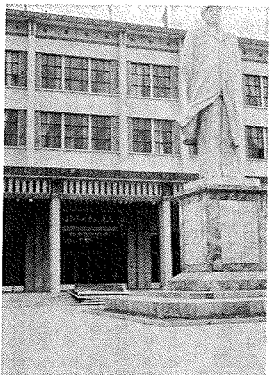
せるため、学生は一定の期間、法律行政に関する実務に参加する実習がある。さらに三年生には学年論文を、四年生には卒業論文の提出が義務づけられている。

国際法学科：中国が国際的に活躍する場が多くなり、その必要性に適応するために、法学部に本学科が設けられた。この学科では、徳育、智育、体育が全面的に発達した、マルクス・レーニン主義の基礎理論と中国の対外政策を十分に理解し、かつ一定の国際法の知識をそなえた専門的な人材を養成している。卒業生には外事、司法、教学、研究に関係ある機関で活躍している。

主な科目には、中国共産党史、哲学、政治経済学、国際共産主義運動史、英語および第二外国語（ロシア語、フランス語、日本語、ドイツ語）、法学概論、憲法、民法、刑法、外国民法、外国商法、中国対外関係史、国際関係史、戦後国際関係、世界経済、国際法、国際私法、国際法特定テーマなどがある。この外に選択科目がある。四年の在学期間中、前半の二年間は政治理論、外国語、基礎知識の学習に重点を置き、後半の二年間は主として国際法およびそれに関連のあるものを学習する。三年生には学年レポートが課せられ、四年生は関連部門の行政司法機関あるいは研究機構での実習に参加した上で、それにもつづいた卒業論文を提出することになっている。

学生が卒業時に修得しておかなければならない学力の標準は、かなりの水準の外国語語学力、より広範な基礎理論の知識と一定の専門分野における実務知識、一般的な国際法の問題点に対する初歩的な研究をしうる能力となっている。このため、この学科の学生には外国語学部系の学生と同程度の外国語の基礎をもつことが入学時から要求されている。

◎国際政治学部：国際政治学科と国際共産主義運動史学科の二学科がある。修業年限はいずれも四年間である。国際政治学科：この学科の任務は、国際的な紛争が増大する情勢に適応するため、マルクス・レーニン主義の



北京大学図書館正門入口と毛主席像

国際政治に関する基礎理論を学習して修得し、党の外交路線と政策を宣伝し、徳育、智育、体育が全面的に発達した、また思想的に確固としたものを持つと同時に専門分野での学殖・能力をそなえた、国際問題の研究、教学および対外的交渉の業務に従事しうる人材を養成することである。

開講されている主要な科目には、哲学、中国共産党史、政治経済学、国際共産主義運動史、国際関係史、世界経済、資本主義国政治制度、国際法と国際機構、外国語、帝国主義論、民族解放運動理論、民族解放運動史、中華人民共和國対外関係史およびその他の専門必修および選択科目がある。この外、さらに時事政治解説、国際問題講座、体育などの科目が設けられている。高学年ではそれぞれのケースに応じて、第二外国語を履修することができる。在学中は、学生は積極的に学術的な活動に参加し、教員の指導の下で、課外の研究活動を行ない、それらを書面で発表する能力を鍛錬する。高学年では学年レポートと卒業論文を提出し、学生が初歩的な科学的研究をなすいう能力と独立思考して活動しうる能力を備えさせるようにとめていく。なお、この学科の学生も入学時には、基本的には外国語学部等と同一水準の外国語の語学力をそなえていることが要求されている。

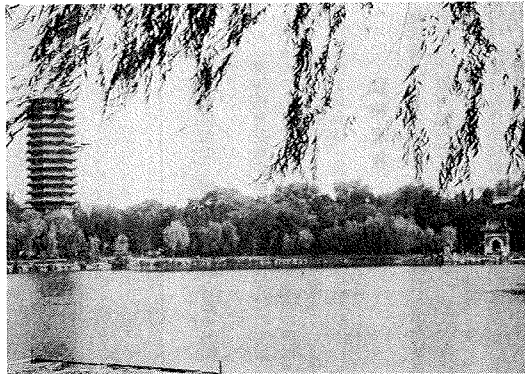
はどうすればよいのか。さらには、図書館が社会主義の新しい時期における総任務を完成させることに奉仕する有力な手段・道具とするにはどうすればよいかを研究するものである。

この学科は徳育、智育、体育の面で全面的に発達した、図書館学の研究、教学および図書館活動に従事するエキスパートを養成することを目指している。この学科では理科系専攻と文科系専攻とに学生を分けており、教学は二段階に分けて行なっている。すなわち、前期二年間ほどは、それぞれ物理、化学、生物、中国語、歴史、経済などの専門に關係ある基礎科目および外国語、政治科目を中心に学習し、後期の二年間ほどは、図書館に關係のある科目をもつばら学習する。その主な科目には、図書館学基礎知識、目録学、欧米語レファレンス・ブック、中国語レファレンス・ブック、科学技術文献検索、専門別目録学、現代図書館管理技術などがある。

◎**東方言語文学部**：この学部には朝鮮語、日本語、蒙古語、インドネシア語、タイ語、ビルマ語、ウルドゥー語、ヒンディー語、ペルシア語、アラビア語、古代インド語（サンスクリット語）の十一種類の言語と文学を研究、教育する学科がある。日本語言語文学科の修業年限は四年間であるが、他の学科はすべて五年間である。この学部

国際共産主義運動史学科：この学科では徳育、智育、体育の面で全面的に発達した、思想でも専門分野の技能でもすぐれた、国際共産主義運動の理論、歴史、現状の研究、教学および宣伝活動に従事しうる専門人材を養成している。開講科目には、哲学、政治経済学、国際問題研究、現代外国政治学説、政治経済学、中国共産党史、科学的社会主義の特定テーマ、マルクス・レーニン主義代表的論文講読、その他の専門分野に關係のある専門の必修および選択科目がある。この外、さらに時事政治解説、国際問題講座、体育、労働などの科目が開設されている。在学中は、關係のある学術研究活動には、学生を計画的に組織して参加させ、三四年生には学年レポートと卒業論文を提出させ、初歩的な科学的研究と独立思考して活躍できる能力を養成している。

◎**図書館学部**：図書館学科を設けており、修業年限は四年間である。図書館学はマルクス・レーニン主義に導かれて、図書館に關係のある方針、任務、活動組織、活動内容および活動方法を研究する学問である。どのように図書館の資料を利用してマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を宣伝し、広範な人民大衆の政治、文化、科学の水準を向上せしむるのに寄与するのか、また、図書館を本道の社会主義における科学と文化の殿堂たらしめるに



初夏の松濠畔，大学構内の北部にあり冬場は絶好のスケート場となる



今年の春館(2月16日)に在京の日本語語文科の先生方

では徳育、智育、体育の面で全面的に発達した、二カ国語(専門外国語については、聞く、話す、書く、読む、訳すの五つのテクニクが正確で熟練した能力をそなえ、英語、日本語、ロシア語などの第二外国語については、五つのテクニクがかなりよい能力をそなえていることが要求されている)をマスターしており、アジア洲の言語と文学およびその他の方面の研究活動に従事しうる専門家と翻訳家、通訳の幹部の養成を目指している。

外国語大学および外国語学部の学生は、政治思想、外国語、文化教養の三つの基本科目をしっかりと身につけておかなければならないという、周恩来総理の指示にもとづいて、この学部には次のような科目が設けられている。中国共産党史、哲学、政治経済学、専門外国語、第二外国語、中国歴史、中国文学、外国歴史、外国地理、外国文学、専攻する言語地域の国家の歴史概況、体育、その他の選択必修科目がある。この学部の学生は、入学時にすでに一定の外国語の語学力の基礎があり、話すことば(発音)がはっきりして明瞭であることが要求されている。

○西方言語文学部：この学部には、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語の四種類の言語と文学を教育、研究する学科がある。徳育、智育、体育の面で全面的に発

達した、外国語と外国文学方面の研究者、教員およびその他の外国語関係者を養成している。修業年限はいづれも四年間であり、外国語大学、外国語学部の学生は政治、外国語、文化教養の三つの基本科目をしっかりと修得しなければならぬ、という周恩来総理の指示に従って、次の科目を設けている。中国共産党史、哲学、政治経済学、専門外国語、中国語、中国歴史、中国文学、ヨーロッパ文学史、各国別概況、各国別文学史、文学作品講読、第二外国語、体育などおよびその他の選択必修科目がある。専門外国語については、学生は四年間の在学中に、単語のアクセント、文のイントネーション、基本語彙、基本文法および「聞く、話す、書く、読む、訳す」の五つのテクニクの修得において、比較的、全面的に十分に合のれた訓練を積んでおかなければならぬ。最後の一年間は、可能な限り口頭翻訳や書面翻訳の実践に学生が参加しうるように配慮し、学習と実践を通じて、問題を分析し、解決しうる能力をもたせるようにしている。なお、この学部の学生も入学時に一定の外国語語学力の基礎をすでに修得しており、話すことば(発音)が明瞭であることが要求されている。

○ロシア言語文学部：この学部にはロシア語学文学科があり、徳育、智育、体育の面で全面的に発達した、ロシ

ア語および文学の研究、教学およびその他のエキスパートを養成している。外国語大学および学部の学生は政治思想、文化教養、外国語の基礎科目をしっかりと修得する必要があるという周恩来総理の指示に従い、学生にはロシア語の聞く、話す、書く、読む、訳すのテクニクをマスターし、ロシア、ソ連文学の歴史と現状を理解し、問題の分析能力と解決能力を身につけ、第二外国語を学習することが要求されている。開設されている科目には、中国共産党史、哲学、政治経済学、ロシア語、ロシア・ソ連文学史、作品講読、ソ連概況、中国語、中国歴史、世界歴史、中国文学、外国文学、外国地理、第二外国語、などの必修科目および言語や文学に関連のあるものやその他の問題についての特別講義、選択必修科目がある。この学部の学生も他の言語文学部と同様に、入学時にすでに一定の程度外国語の語学力を有し、かつ、話す言葉(発音)が明瞭であることが要求されている。

(中国文学科教授・とりい かつゆき)



## お知らせ

### 編集委員募集

書評運動は、生協運動の一環である教育・文化活動を担って発展してきました。しかし、現在の文化が、画一化・既成化される中で、独自の文化活動を完遂させなければならぬのにかかわらず、編集委員不足という物質的な絶対的不足とそれにも増しての編集委員の力量不足が相乗的に重なってしまい、満足のいける活動はできていません。

そこで書評編集委員を募集したいと思います。現在の閉ざされた暗黒の文化情況に少しでも独自の文化の火を点したいと思っている方、あるいは新たな文化運動、思想運動の必要を感じている方、編集の仕事を手伝いたいと思っている方、是非書評編集委員会においで下さい。

○原稿は原則として縦書きで、1行25字、22行を1枚とします。

○原稿には住所・氏名・学部・電話番号等連絡先を詳しく明記して下さい。

○原稿は一切返却しません。必要な場合はコピーをとっておいて下さい。原稿の採否に関する問い合わせは一切応じません。採用分にはこちらから連絡します。

### ○連絡先

〒565 吹田市千里山東3-10-1  
関西大学生協同組合「書評」編集委員会  
電話 06-388-1121 内線776

### 合評会に関するお知らせ

書評編集委員会では、ともしれば一方的になりがちな書評を、読者の意見・感想をとりあげた「読者の参加する書評」を目ざし、合評会を開催します。今後の読者の積極的参加を望みます。

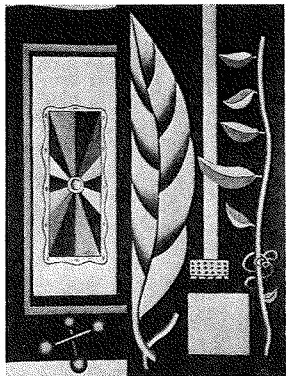
私たちは諸君に自由で、創造的な活動の場を提供したいと思えます。

なお、書評編集委員会の活動は、書評誌の定期刊行化はもちろんのことですが、講演会、映画会の開催等の、広範な文化・思想活動を形成しようと考えています。

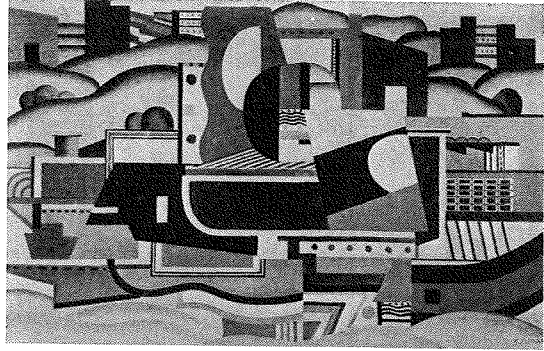
書評編集委員会は、読者の積極的参加を期待します。

### 投稿規程

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表論文、エッセイ等どのようなものでも結構ですし、書評誌の中の個々の作品に対する反論・批判等でもかまいません。詳細については生協本館3F組織部内書評編集委員会まで直接にお問い合わせ下さい。



木の葉のコンポジション



大きな曳船

## 編集後記

書評53号で満ちながら休ませていただいた山村嘉己先生の「研究余瀟——ボードレール」を再び掲載します。そのおわびの意味をも含めて、お知らせしておきます。

また、今回の書評54号も、前回の53号同様、内容に焦点がなく、非常にあいまいなものになってしまったことを、書評編集委員会の力量不足として反省しています。

来年からは、編集委員会内部でじっくりと内容が討論され、真の意味で自らの問題となり得た企画を、年間計画としてたて、その企画にあわせ、原稿依頼をしたり、きっちり締り切りの日を決めて投稿を募って、今後一層の内容充実を図っていかうと考えています。読者諸氏の、より一層の書評運動への関りをお願いする次第です。

## 書評編集委員会

### 八〇年度活動の総括

八〇年度の書評運動——その中心としての書評誌の編集、発行活動は、これといった年間テーマもなく、四月に発行された51号の「現代青年論」、六月に発行された52号の「追悼サルトル」、九月に発行された53号の「大学—教育問題I」、そして今号の「大学—教育問題II」と出して来ました。しかしながら、読者の皆さんもこれらの号を読んで既にお気づきのことかと思われるが、どの号をとってみても、その号全体を通じての一貫性、言うなればモチーフに種薄性があったと思います。そして、結果として、そもそも「書評」というものが持つ、文化・思想運動としての機能を、まだまだ充分果していない現状があるかと思えます。

このような現状を生み出しているものとして、次のような要因があげられると思います。第一には、編集委員各々の持つ問題意識の種薄さと、それを克服していくものとしての学習活動の怠り、編集部内部での討論不足があげられると思います。第二には、読者自身の書評に対する関りの形骸化があると思います。つまり、書評が最近になって内容の厳密性が欠けられている現実があるのであれば、読者の間から批判、意見の投稿があるのが当然なことだと思うのですが、そういう投稿はありませんでした。価値の多様化、情報の過剰性など、そうならざるをえない要因もあると思いますが、エゴ・アイデンティティというものはすでに形成さ

れ学生として物事を判断し把握していく目はすでに確立されているのだから、個々の思想レヴェルでの批判がでて然りだと思ふのでは。このような受け手側が、傍観者にすぎないということも一要因だと思えます。

私たち書評編集委員会は、このような現状を直視しつつも、きちんと足元を見つめ自分たちがやっていけることから、自分たちに責任がもてる範囲で、講演会、映画会などを企画していくということを前提として、まず手はじめに五十嵐良雄氏を招き、大学問題をテーマとして講演会を開催しました。

今後その方針にそい、なおいっそうの発展をはかるべく、一年間の年間テーマを設定し、それにそった形で、書評を出し、講演会を開催していくことを考えています。